



演劇は 社会の 処方箋

やってみようプロジェクト

文化庁委託事業
令和3年度障害者等による文化芸術活動推進事業
(文化芸術による共生社会の推進を含む)



はじめに

福島明夫(日本劇団協議会専務理事／青年劇場代表)

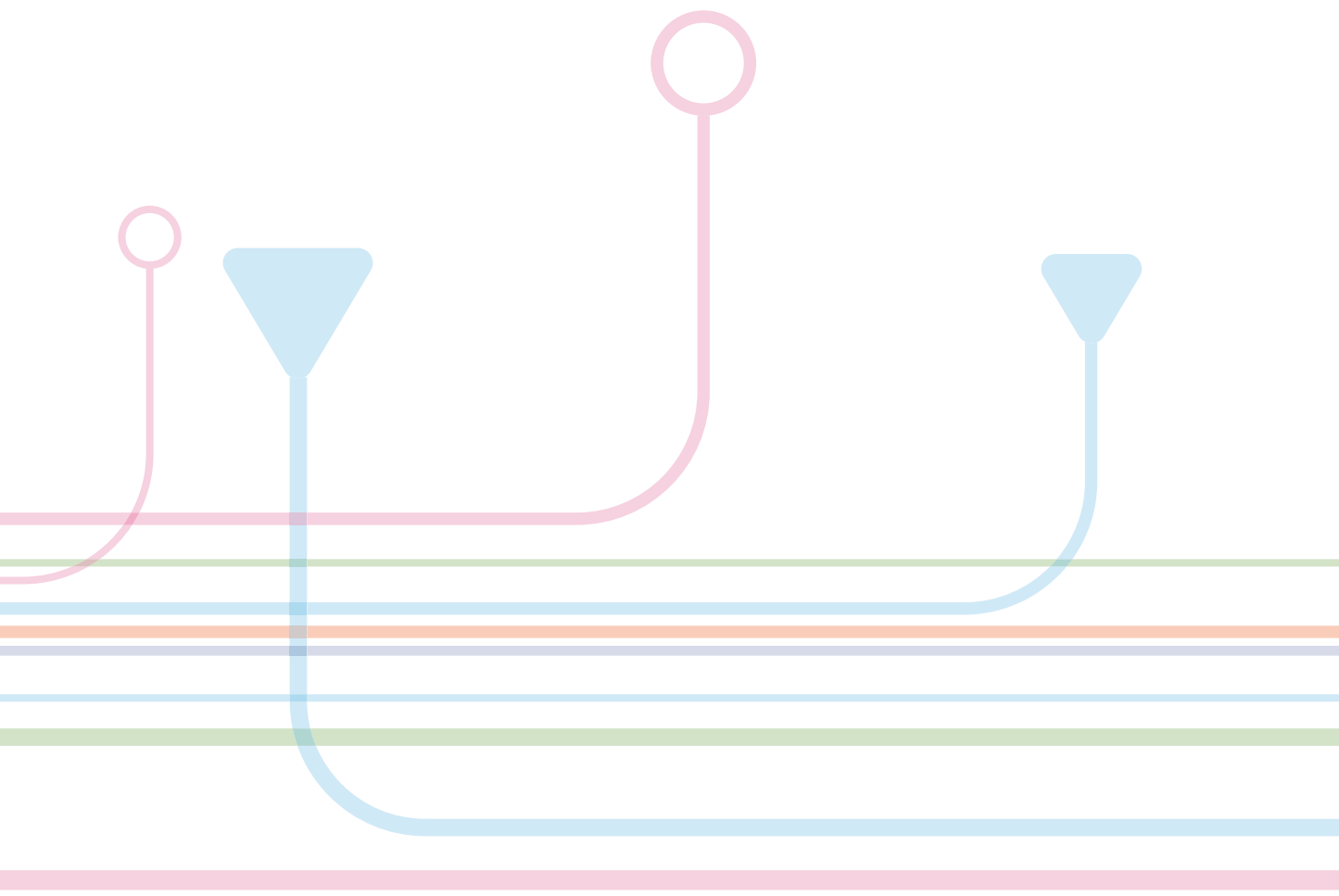
ありとあらゆるところで枕詞になってしまったコロナ禍ですが、本事業も 2020 年度に引き続き、21 年度も大きな影響を受けての実施となりました。特にデルタ株の感染が広がった第五波によって、七月前半まで対面での実施が困難になったことに加えて、一月からの第六波オミクロン株の感染が子どもたちに広がったこともあって、今年の実施もほぼ半年間に絞られました。とはいえ、その中でも本事業の意義を見出す上での貴重な果実が生み出された年でもありました。

一つはその地域的広がりです。この報告書にもありますが、わらび座、TEAM SPOT JUMBLE の参加により、秋田、沖縄で実施することが出来ました。首都圏以外では、兵庫県で実施してきましたが、今回は兵庫県立ピッコロ劇団に続き、地域にプロの劇団が存在することの有意を示すものとなりました。

そして対象の広がりです。今年加わったのは沖縄県名護

市で実施した「医療的ケアを要する在宅療養児とその家族とともに避難所での共助を育む演劇ワークショップ」「ヘルスリテラシーワークショップ」での看護学科の学生たちです。以前、文学座が独自で慶応病院で医師と看護師を対象に、俳優たちが患者役を演ずるワークショップを行ったことがあります。災害時に起こり得ることを想定し、シナリオを作って演ずることの意義、効果についてはぜひ報告をお読みいただきたいと思います。

さらに協力者の広がりです。さいたまの若者自立支援ルームでのプログラムには、彩の国さいたま芸術劇場が参加してくださいましたし、沖縄でのプログラムには名護療育医療センター、名桜大学のお力添えを頂きました。新たに加わって下さる団体に加えて、継続して行う事業によって、そこに参加・協力して下さる方々が増えていくことも嬉しいことです。岐阜県華陽フロンティア高等学校の報告でも継続の必要性が強調されていますが、この五年間の実施



で、事業を継続することが出来た地域での変化を見た時に、地域的な、あるいは対象の拡大を図りつつも、同時にそれを継続させる必要性を痛感させられます。

また、この調査報告書での評価手法も昨年から MSC (モスト・シグニフィカント・チェンジ) に加えて KPI (キー・パフォーマンス・インディケーター) を併用したのとなっていて、このことにより参加者の変化に加えて、施設内で起きた変化、地域社会で起きた変化、さらに行政の変化などをトータルな視点で捉えられた報告書になったと感謝しています。ここにはこれらのプログラムがどのような影響を与えるものになり得るのかを、わかりやすく伝える中身が書かれています。

とはいえ、コロナ禍の影響で実施が短縮されたり、期間が変更されたりしたことは大変残念でした。この報告でも当初の予定通りの実施が出来ていればという講師側の無念を感じていただけるものと思います。

ただ一方でこのコロナ禍だったからこそ、対面で実施出来た時のインパクトは、このプログラムに参加した講師陣、演劇人にとっても大きかったようです。新たな人間関係作りがもたらせるものの重みも感じ取っていただければ幸甚です。

私たちの取り組みも、当初は社会的課題解決に演劇的手法をどう生かせるのかという仮説から始まったものですが、それはもはや仮説ではなく、今日の社会から疎外された人々の増大に対して、演劇的手法、演劇を活用する場を広げることは、緊急課題になっているとすら考えます。私たち演劇人が専門家だからこそ出来ることを相互に研鑽しながら、そこに関わる幅広い人々との協力関係をもとに取り組みが広がることを願っています。劇団がそこにあること、街に劇団が、演劇人が存在することの意味がまた違った景色で見えてくるようにも思うのです。



CONTENTS

はじめに／福島明夫 2

令和3年度やってみようプロジェクト 実施一覧 6

調査研究報告 9

参加型・質的評価手法MSCの活用 10

さいたま市若者自立支援ルーム(桜木)演劇プログラム 11

「はまごであそぼう」在日外国人を対象とした演劇ワークショップ 1

華陽フロンティア高校 演劇ワークショップ 27

医療的ケアを要する在宅療養児と
その家族とともに避難所での共助を育む演劇ワークショップ 35

社会の処方箋となるために
—医療現場の期待に応え、協働で新たな可能性を探る— 5

参考資料 52

やってみよう プロジェクト

「やってみようプロジェクト」は、さまざまな社会課題を持つ人々を対象に、演劇的手法を用いたコミュニケーションワークショップで周囲と繋がりを持ち、誰一人取り残されない共生社会の実現を目指すプロジェクトです。

今年度は以下のワークショップを実施しました。

「シアターエデュケーション」

秋田県内特別支援学校の授業の一環として、中等部～高等部のクラスを対象に演劇、ダンス、歌唱を組み合わせたワークショップを2校で実施。自由に表現し、コミュニケーションの楽しさを体感するプログラム。

実施地域	秋田県潟上市、能代市
協力団体	特別支援学校天王みどり学園、能代支援学校
対象	知的・身体障害の生徒（中等部～高等部）
会場	天王みどり学園、能代支援学校
回数	天王みどり学園4回 能代支援学校6回
講師	神谷あすみ、瀬川舞巴、山田愛子（以上、わらび座）



さいたま市若者自立支援ルーム「演劇プログラム」

「若者自立支援ルーム」に集まる中高生から30代のさまざまな課題を抱える若者に、演劇ワークショップでコミュニケーションを培いながら、演劇を通して交流し相互理解を深め、表現することにもチャレンジし自立への後押しとするプログラム。さいたま市内の2か所で演劇ワークショップ、劇作ワークショップを実施した。

実施地域	埼玉県さいたま市、浦和市
協力団体	NPO 法人さいたまユースサポートネット × 彩の国さいたま芸術劇場
対象	若者自立支援ルームを利用している青年
会場	さいたま市若者自立支援ルーム（桜木・南浦和ルーム）
回数	20回
講師	板倉哲、崎山直子（以上、青年劇場）

「医療的ケアを要する在宅療養児とその家族とともに避難所での共助を育む演劇ワークショップ」

台風襲来の多い沖縄県では、在宅医療児やその家族は避難生活ではさまざまな困難があることから、在宅療養児とその家族への災害時支援について、名桜大学看護科の生徒に「シミュレーション演劇」で避難所でのトラブルを体感し、共助のあり方、コミュニケーション方法について学ぶプログラムを実施した。

実施地域	沖縄県名護市
協力団体	名護療育医療センター × 名桜大学
対象	名桜大学 看護学科の生徒、地域の看護師
会場	オンライン、名桜大学
回数	4回
講師	島袋寛之（TEAM SPOT JUMBLE）



「ヘルスリテラシーワークショップ」

名桜大学看護学科の教授・学生と障害者の方にもわかる感染症対策の必要性について学べるワークショップを実施。なぜマスク・手洗いが必要性なのか、知的障害を持つ方が理解できる演劇作品を看護科の生徒と創作し、オンラインで各施設へ作品を届けた。

実施地域	沖縄県名護市
協力団体	名桜大学 × 福祉施設海陽園
対象	名桜大学 看護学科の生徒
会場	オンライン、名桜大学
回数	9回
講師	島袋寛之 (TEAM SPOT JUMBLE)



「障害児童コミュニケーションワークショップ」

特別支援クラス・デイサービスに通う障害をもつ児童・その家族に、自由に表現することの楽しさや、達成感が得られるプログラムを取り入れたワークショップを実施した。

実施地域	沖縄県沖縄市、中頭郡西原町
協力団体	スマイリーはうす × 比屋根小学校 × 宮里小学校 × 諸見小学校
対象	特別支援クラス、デイサービスに通う児童
会場	スマイリーはうす、比屋根小学校、宮里小学校、諸見小学校
回数	5回
講師	島袋寛之、与那嶺圭一、蔵元利貴 (以上、TEAM SPOT JUMBLE)



「にほんごであそぼう in 小野市」

兵庫県小野市で生活する外国人およびその家族、職場・地域で関わりのある日本人を対象に日本語による表現ワークショップを実施。日本の生活になかなかなじめない外国人の参加を促し、日本人・外国人が交流することで地域社会への参加につなげた。家族を対象とした回では、0才から中学生まで多くの子どもが参加した。

実施地域	兵庫県小野市
協力団体	小野市うるおい交流館エクラ × NPO 法人小野市国際交流協会
対象	小野市在住の外国人、親子、日本人
会場	小野市うるおい交流館エクラ
回数	4回
講師	本田千恵子、菅原ゆうき、三坂賢二郎、堀江勇氣、木村美優 (以上、兵庫県立ピッコロ劇団)



「からであそぼう、コミュニケーションワークショップ」

居住型および通所型介護施設を利用する認知症高齢者と、東村山市青葉町・秋津町の地域ボランティアのスタッフにおいて、コミュニケーションワークショップを実施。施設内への立入りが難しかったためオンライン中心となったが、高齢者の方のQOLの向上につなげることができた。

実施地域 東	京都東村山市
協力団体 社	会福祉法人「はるび」×白十字会あきつの里×
東	村山市青葉町・秋津町安心ねっと×東村山市社会教育福祉協議会
対象 各	施設の入所、通所の高齢者、高齢者見守りボランティア
会場 オ	ンライン、はるびの郷、あきつの里、青葉地域センター
回数 1	4回
講師 西	海真理（朋友）



「からだであそぼう、コミュニケーションワークショップ」

特別な事情を持ち施設に居住する児童養護施設の子どもたち、放課後家庭で一人になってしまう学童保育の子どもたちのためのプログラムを実施。静止画やインプロなどグループで取り組むワークや、身体で表現したり想像力を使い人に対する興味につなげるワークなど取り入れた。

実施地域 東	京都杉並区
協力団体 児	童養護施設「杉並学園」×杉並区立西荻北児童館
対象 小	学生
会場 杉	並学園、西荻北児童館
回数 6	回
講師 西	海真理、水野千夏（以上、朋友）



調査研究報告書

田中 博(一般社団法人参加型評価センター)

松下聖子(公立大学法人名桜大学 教授)

■さいたま市

若者自立支援ルーム(桜木)
演劇プログラム

■「にほんごであそぼう」

在日外国人を対象とした
演劇ワークショップ

■岐阜県立華陽フロンティア高等学校

演劇ワークショップ

■医療的ケアを要する在宅療養児と その家族とともに避難所での共助を育む

演劇ワークショップ

参加型・質的評価手法 MSC の活用

今年度のさいたま市若者自立支援ルーム(桜木)演劇プログラム「在日外国人を対象とした演劇ワークショップ」「にほんごであそぼう」「華陽フロンティア高校演劇ワークショップ」のプログラムの評価には、参加型・質的評価手法である MSC (Most Significant Change) を採用して、演劇ワークショップが始まってから現在までの関係者に起こった「重大な変化」をエピソードの形で収集、分析しました。MSC 手法について解説します。

1 MSC (Most Significant Change) とは?

1990年代にリック・デイビスによって考案された、参加型・質的評価手法です。Most Significant Change とは、「最も重大な変化」という意味です。「重大」に関しては、量が多いというよりも、「意義がある」「意味深い」という内容です。社会や人間の意識や行動の変容など、数量化できない変化の把握や分析に効果的です。オックスファムなど欧米の NGO による国際協力活動で多く実施されており、教育や福祉など、人間を対象としたプログラムの改善志向の評価に有効とされています。

2 なぜ MSC を活用したか

「やってみようプロジェクト」における演劇ワークショップ (WS) は、演劇を通じて参加者にはたらきかけ、参加者の意識や行動に変容を起こすことを共通の目的としています。このような変化は一般的に数量化・定量化できない、もしくは難しいため、従来のロジックモデルの指標を計測する方法のみでは、平均的な進捗はわかっても、「一人一人にどのような変化のプロセスがあったのか」「変化の背景にはどのような要因があったのか」「どうすればプログラムをより良く改善できるのか」といった質的 (定性的) な現状の詳細を把握したり、分析したりすることは困難です。これに対して、MSC は現場から「重大な変化」をエピソードの形で集め、それらを比較検討し「最も重大な変化」を選ぶ過程を通じて、変化の詳細やプロセス、背景を把握し、またプログラムを改善していく教訓を学ぶことができるのです。

3 MSC の3つの特徴

1 質的 (定性的評価) である

活動現場で起こった変化をいきいきとしたエピソード (物語) の形で収集します。数字におきかえることができない、適切でない変化の詳細を把握することができ、またその変化の背景にある促進要因や阻害要因を分析することが可能です。

2 参加型評価である

外部の専門家が一方的に調査し、判断する従来型評価と異なり、受益者やスタッフなど幅広い利害関係者が、エピソードの収集や選択に参加します。この過程を通じて、現場の視点が評価結果に反映されるとともに、参加した関係者の当事者意識やモチベーションの向上につながります。

3 組織学習を生む

MSC 評価を通じて、活動をふりかえり、教訓を得てプログラム (活動) が改善されるとともに、プログラムを実施している組織自体が成長するといわれています。また評価に多くの関係者が参加することで、受益者とスタッフなど、関係者同士の相互理解を促進する特徴があります。

田中 博

一般社団法人参加型評価センター代表理事、日本評価学会認定資格評価士。(特活) ヒマラヤ保全協会事務局長として 10 年以上、ネパール農村での参加型開発に関わる。英国サセックス大学国際開発研究所大学院修了。国際協力機構 (JICA) や (特活) 国際協力 NGO センター (JANIC)、トヨタ財団、環境省などで評価に関する研修講師、NGO/NPO の海外・国内プロジェクトの評価ファシリテーターを多数行う。JICA 草の根技協評価スキーム検討委員や、(特活) 日本 NPO センター、(公財) 京都市ユースサービス協会などで評価アドバイザーを務めた。共著に「自分達で事業を改善できるようになった!」源由理子編著 (2016)『参加型評価～改善と改革のための評価の実践』晃洋書房、がある。

tanaka.pecenter@gmail.com

さいたま市 若者自立支援ルーム（桜木） 演劇プログラム評価報告



1

背景・目的・ プログラム概要

1

背景

本演劇プログラムの舞台となった「さいたま市若者自立支援ルーム（桜木）」（以下、ルーム）は、さまざまな理由から、高校中退や不登校、ひきこもり・貧困など悩みや問題を抱え、社会において孤立感を感じている高校生から30代の若者たちに、安全・安心に過ごせる「居場所」を提供している。

2

プログラムの目的

社会的に孤立している青少年を対象に、プログラムで新たな価値観に出会うことで自己を知り、他者理解を深め、コミュニケーション力を培い、自己肯定感を得て自立への手がかりがつかめるよう支援する。また、ルームの社会的認知を広げ、居場所を求めている若者とルームのつながりを支える。

3

ルームの活動内容

ルームの活動は、平日の日中に開室している、雑談や絵画、手芸、共同での調理、英語など曜日が決まっている

プログラムや、季節行事に連動したイベントの開催が中心となる。個々の利用者の事情を考慮し、職員間で情報を共有し、他の支援機関と連携してきめ細かい支援を目指している。

演劇プログラムはルームの一室にて隔週ペースで開催する。令和3年度は5月12日、26日、6月9日、23日、7月7日、21日、10月13日、27日、11月24日、12月8日、1月12日、2月2日の12回実施された。内容は、講師によるパフォーマンス、アイスブレイク、シアターゲーム、詩の朗読、インプロビゼーション（即興）短編コントの読み合わせ、劇作ワークショップ、発表会の練習などである。ルーム利用者であれば誰でも自由に入出りできる無料のプログラムとして行われた。2017年度から開催されており、今年度（2021年）で5年目である。

4

実施体制

以下、3団体が主体となって協働する。

- 地域活動団体：NPO 法人さいたまユースサポートネット
- 地域文化施設：彩の国さいたま芸術劇場
- 芸術団体：秋田雨雀・土方与志記念青年劇場（講師）

2

2021 (令和 3) 年度の評価調査の概要

1

評価の目的

評価の目的は、「これまでの演劇プログラムによる影響で、ルームの利用者・関係者に起こった変化を、質的・量的に把握し、プログラムの有効性を検証するとともに、変化の詳細や背景にある要因を分析し、今後の活動に活かしていく」とした。

2

評価調査の概要

質的 (定性的) 手法である、MSC (モスト・シグニフィカント・チェンジ)¹と、KPI (キー・パフォーマンス・インディケーター) を併用した。また調査者による演劇プログラムの見学を行った。このように質的調査と量的調査を併用することによって、バランスの取れた事実認識と価値判断を行えるように工夫した。以下に詳細を記す。

①**MSC 調査** 利用者をよく理解しているルーム職員大木氏、松田氏を含む 5 名と、ボランティア 1 名を情報源とし、質問紙調査によるデータ収集を行った。時間の範囲を

「演劇プログラムが始まってから今まで」とし、変化の領域を下記 3 種類設定し「重大な変化」のエピソードを 7 編ずつ収集した。

- 参加した若者の意識や行動に起こった変化
- 自立支援ルームの施設内に起こった変化
- 自立支援ルームを取り巻く地域社会に起こった変化

記入された質問紙を活用して、2021 年 10 月 28 日に、ルームの大木氏、松田氏、講師で青年劇場の板倉氏の 3 名の参加でオンライン (Zoom) にて、各領域から「最も重大な変化」を 1 編選ぶエピソード選択会議 (データ分析) を行った²。(回答内容については原文のまま掲載)

②**KPI 調査** KPI は、日本語に訳すと「重要業績評価指標」という意味で、目標を達成する上で、その達成度合いを計測するための定量的で最も重要な指標のことである。本プログラムの目的に鑑み、ルーム職員と相談の上、KPI を利用者の自己肯定感につながる「利用者のチャレンジ精神」とした。

③**プログラムの見学** 2021 年 12 月 8 日に調査者が演劇プログラムを見学 (参与観察) し、また講師 3 名にインタビューを実施して、追加的情報を収集した。

3

MSC 手法による評価

1

参加した若者の意識や行動に起こった変化

領域の 1 番目である「参加した若者の意識や行動に起こった変化」に関して 7 編のエピソードが報告された (表 1)。エピソード! 「自信をつけて社会に巣立つ」についてルーム職員から以下の補足があった。「たいへんな過去をもつ A さんが演劇プログラムに参加し 3 年かけて『自分を表現していいんだ』と自己肯定感を持ち、最終的に就職することができた。大きなきっかけは演劇プログラムだと本人も認めている」また A さんは、その後 NHK ラジオのインタビューに答える機会があり、堂々と発言したという。また “ 「自分を創って演じる」と \$ 「自己評価の上昇」の C さん

は「はじめは『自分には価値がない』と自己肯定感が低かったが、演劇プログラムで『演劇が生きがい』となり、劇が書けるようになるまでになった」点が意味深いとされた。% 「表現する喜びと葛藤」に関しては講師から「これまでではそれぞれ他者に関心がない傾向があったが、C さんからの影響もあり、今年度は利用者がお互いに脚本と演技に相互批評できるようになるまで理解が深まった。お互いに認め合いリスペクトできるようになった。これはルームの精神に合致している」とコメントがあった。議論の結果、% 「表現する喜びと葛藤」を最も重大な変化のエピソードとして選択した (表 1 下線)。選択理由は「% は! や” \$ の変化を含み、演劇プログラムの全体的な効果と意義を包括的に表現している」というものであった。

表1 参加した若者の意識や行動に起こった変化

	重大な変化	重大に思う理由
① 自信をつけて 社会に巣立つ	Aさん、障害あり、無就労。連続参加30代。ルームを卒業して希望している職業に就職できた。クリスマス会のピンチヒッターで演劇に参加。ちゃんと演じて芝居を全うした。緊張したが、達成感があった。3年目のプログラムに参加、クリスマス会に役者として出演。次は社会に出たいという気持ちが芽生える。就労支援プログラムに参加し、結果として2021年2月に希望する就職先に採用され、元気に通っている。	Aさんは、3年前に来た時は緊張と不安でガチガチ。自分を変えたいけど、いじめにあったり、対人恐怖があった。いろいろなプログラムに参加したが、演劇プログラムは安心して自分を表現できる場。表現する喜びを得た。
② 自分を創って 演じる	Cさん、20代男性。4年目から参加して2年目。警戒心強い。最初からは参加していないが、なにかきっかけで参加。自己開示の欲求あり。イラスト描く。プログラムに参加する中で壁が崩れていった。初年度の後半から積極的になってきた。今は自分で台本を書いて演じるだけでなく、演技指導もやるようになった。利用者向けクイズもやっているアイデアマン。	観察していると、前は特定の人としか話さなかった。今は自分から全スタッフ、他の利用者に話しかけるようになった。演劇プログラムを通じて、心の中の壁が崩れたからと思われる。大きな一歩。
③ 自己表現は 自分だけのものだったが、 演劇プログラムで 皆に向けて発信した。	Mさん(17歳女性、不登校、引きこもり) 昨年度演劇プログラムに参加。他プログラムに参加することはない。先輩参加者の見本を見て触発される。プログラムに参加しただけではなく、演技もした。「今度自分で作品を作りたい」といって徹夜で書いてもってきた。次の機会に本人含め皆で上演した。保護者の方が驚いた。	もともと自己表現に関心があったが、機会がなかった。演劇プログラムを契機に開花した。SNSで細々とやっていた。
④ 自己評価の上昇	自分は生きる価値が無いと頑なだった利用者が、演劇に参加したことで「唯一の取柄は劇作」と言えるようになり、積極的に台本制作をするようになった。それをきっかけに、いろいろな案をスタッフに提案してくれたり、興味のあることにチャレンジできるようになってきた。	自尊心が高まり、「自分にもできることがある」と思えるようになったから。ネガティブな発言しかなかったのが、少しずつポジティブな発言をするようになったから。
⑤ 表現する喜びと葛藤	脚本を書くこと、演じること、そうしたことを議論することなどに積極的かつ主体的に取り組む利用者がでてきたこと。	主体的に活動することで周りの人に認められ、本人も楽しく充実した時間を過ごすことで自立へ向けた意欲が涵養された。
⑥ 無題	なかなか集団に入ることができない利用者さんが演劇プログラムには入ることができ、集団の中で発言したり自己表現をしたりと積極的に参加していた。また、創作が好きなどところを生かし、脚本を自作してくる姿も見られた。	もともと2次創作や配信アプリなどネット上での自己表現活動をしており、演劇プログラムへの興味はあったものの、集団に入る経験をほとんどしたことがなかったため、プログラムの集団に入れるかが課題であった。しかし、自分の好きなことができる、演劇が好きという共通点を持った利用者さんが集まっているということでのびのびと活動ができた。また、今まで利用者さん本人の世界の中でとまっていた創作力が脚本というかたちで外に現れ、青年劇場の方や他の利用者さんに脚本の出来栄を褒められるなど、自己肯定感の向上、演劇プログラムへのモチベーション向上につながったため。
⑦ 無題	参加者の何人かが、演劇プログラムの過程で、自身の作によるオリジナルな作品、劇作を試みるようになっていったこと。	これまでも自立支援ルームの利用者が、絵画などアートワークを通じて自己表現することはあったが、劇作という言語表現で、それを試みはじめたことと、自己を相対化するという契機を得たこと。ただし、内容はコント的なもので、自らの状況、環境や世界(生活)を客観視し、再構築していくという所までは到達していない。

2

自立支援ルームの施設内に起こった変化

演劇プログラムを行っているルーム内の変化であり、7編のエピソードが収集された(表2)。「他の利用者に演技が及ぼす影響」は、「プログラムに参加していない利用者が、演劇プログラムの様子を見て、参加している利用者の意外な一面を知る機会となっている」点、「プログラムのルーム内における他の部署への影響となっている」点が良いとされた。「正しい自己表現を知らなかった」は、意味ある内容だが、これは(1)の「参加した若者の意識や行動に起こった変化」に属する変化で、すでに(1)で語られているため選択肢から除外された#「楽しみを覚えたスタッフが演じる」は「職員として)自分自身の変化があった。演劇プログラムで吸収したものを、また別の場所で生かすことができた。まさにスタッフの変化」との

コメントがあった。「利用者の増加」には、「演劇プログラムを目的に、ルームに来る利用者が実際に増えている。直近では昨日の利用者にも演劇プログラム目的の方が多かった」「(演劇プログラムは)ルームの看板プログラムになった。これはルームにとって大きな変化である」との利用者の増加が語られた。「スタッフと利用者の関係性の変化」は、講師によると「利用者のスタッフ(職員)へのアプローチが変わったと同時に、新人職員の利用者への関わり方がぎこちないものから、『やわらかくも毅然とした対応』ができるようになった」という。プログラムを通じてスタッフと利用者が相互に影響を与え合う関係になったところが素晴らしいとされた。議論の結果、「スタッフと利用者の関係性の変化」を最も重大な変化として選択した(表2下線)。選択理由は「プログラムを通じて、利用者」とスタッフがお互いに影響・変化し合っている。スタッフがソーシャルワーカーとして成長した」ことがみとめられたからである。

表2 自立支援ルームの施設内に起こった変化

	重大な変化	重大に思う理由
① 他の利用者に 演技が及ぼす影響	大部屋の隣でやっているの、周りの利用者がプログラムを見ている。知っている人などが意外な演技を見て、その人の違う一面も見たり、演劇プログラムに参加を始めた人がいた。	スタッフの視点から見ると、人に意図せずに影響を与えるということに、演劇の力を感じるから(普段知らない姿を見られるなど)
② 正しい自己表現を 知らなかった	Sさん(20代後半男性)、プログラムに参加せず、わざと職員に悪態をついたりした。注意されるだけのコミュニケーション。演劇プログラムに誘ったところ、参加した。物凄く迫真の演技をした。それから参加してくれるようになった。クリスマス会でもでないと欲していたが、最終的に出た。	正しい自己表現方法がわからないので、悪態について職員の関心を引いていたが、実際は演劇の才覚があった。演劇プログラムに声をかけて、参加してもらったことがよかった。
③ 楽しみを覚えた スタッフが演じる	スタッフに起きた変化だが、ハロウィンでスタッフが芝居の脚本を書いて、練習をして、演技をして利用者さんに発表した。「面白かった」との声。	演劇プログラムがなければ、そのような機会はなかった。演じる楽しさを知ることになったので。
④ 利用者の増加	演劇プログラムに参加するためにルームに来られる利用者が増えた。演劇プログラムに参加している利用者の一部は来室頻度が上がった。	外に出ることが苦手な利用者が、今までよりも外に出られるようになったから。
⑤ さまざまな葛藤を 抱える若者たち	脚本を書いて表現するということは、それが作品として認められるかどうかという苦しい状況に向き合うことにもなる。個人の葛藤、利用者間の葛藤、ときにはスタッフの葛藤、そうした葛藤が苦しいながらも変化につながり、その結果として自立につながることもある。	葛藤に向き合うことなしに自立への変化は生まれにくい。
⑥ 無題	演劇プログラムを他の利用者から見える部屋で行うことで、興味を持って見学・参加してくれる利用者さんが増えた。また、演劇プログラム目的で来室する利用者さんが増えた。	演劇プログラム目的が来室のきっかけとなり、演劇プログラム以外の日も来室に繋がるなど、来室者数増加につながったため。
⑦ スタッフと利用者の 関係性の変化	多くの自立支援ルームのスタッフ(または利用者との関係性の構築を意識しているボランティアなど)が、演劇プログラムに参加することで、その関係性を作り出す際に、そこで得た知見、経験をもとに新たなアプローチを試みたり、その成果を付け加えることができるのではないかと。	このスタッフによる新たな試みや、利用者との関係性の構築へのアプローチの豊富化によって、自立支援ルームの果たすべき役割と可能性の向上を認めることができるから。また、これらのことを通じて、ソーシャルワークの質の向上、新たな知見の蓄積や、さらには、いまだ十分に確立したとはいえない「若年層への支援」対人、感情、労働としての、いわゆるケース・メソッドの確立の可能性を読み取ることができるので。

3

自立支援ルームを取り巻く
地域社会に起こった変化

3番目の領域は、「自立支援ルームを取り巻く地域社会に起こった変化」であり、7編のエピソードが収集された(表3)。プログラムの目的はあくまで場づくりと人との交流であるが、例年利用者から「自己表現」したいという希望がでるため、発表の場としてクリスマス会が行われている。また会は利用者地域との交流の場ともなっている。それに関して#「子供たちの成長をかみしめる」では、「観劇した保護者が利用者の『非日常』の変化を客観的に見る機会を提供し、保護者からの感動の声があがった」ことが重要とされた%「地域のなかで表現して認められる喜び」においては、「成果を地域の方に観てもらえる、利用者が温かい拍手によって達成感や自己肯定感が芽生える」ことができ「地域の中で演劇が根付く機会」を提供

している点が評価された。これに加えて、「これ以外の交流は多くが、地域の方に利用者が“もてなされる側”(もちつき大会など)だが、クリスマス会は逆に利用者が地域の人々を“もてなす側”になる」要は、「これまで受動的に地域からの支援をTakeすることが多かった利用者が、クリスマス会で成果を発表することを通じて、地域の方々にGiveする機会を得られ、それを通じて利用者の自己肯定感が向上した」ことが意味深いとされた。『公的劇場・ホールとのコラボレーション』は「公的ホールとの協働は、5年前から目指していたが、まだ道半ばである」とのコメントがあった。意見交換の結果%「地域のなかで表現して認められる喜び」を最も重大な変化として選択した(表3下線)。選択理由は「地域の方との交流そのものが限られている中で貴重な機会」であり、「地域の人と交流し、もてなすことを通じて利用者の自己肯定感があがった」からである。

表3 自立支援ルームを取り巻く地域社会に起こった変化

	重大な変化	重大に思う理由
① 地域の方へ アピールの場	クリスマス会の来賓でさいたま市長をはじめ、自治会の人などが来てくれること。来賓の皆様は活動を知ってもらえた。時間がおしても最後まで観てもらえた。	自立支援だけではわかりにくい、演劇プログラムは具体的なので、注目されやすい。結果的にルームを知ってもらえる。
② ルームの 看板プログラムとして 地域へ紹介	ルームに初めて来た人にルームの紹介をする。過去の写真を見せると、結構な人が(保護者・当事者・関係機関)関心を示す。プロの協力や発表の場など。来なくなる気持ちが強まる。	ルームに繋がってもらえるきっかけはひとそれぞれ。演劇プログラムは魅力的で大きなきっかけになる。
③ 子供たちの成長を かみしめる	自分の息子や娘が演技するのを観た保護者が「これまでの人生で継続的になしとげたことがない」「自分の知らない一面を見て感動した」という声をいただく。	「これまで何かなしとげた経験がない」「社会から遮断されていた」子供たちが、何かをなしとげる最初の経験になったから。
④ クリスマス会	クリスマス会での演劇発表に、地域の人や保護者が見に来てくれるようになった。	利用者が喜んでいたので。
⑤ 地域のなかで 表現して認められる 喜び	現在ではできない状況になっているが、クリスマス会などの行事の際に、プログラムの成果発表の場を設けることで、地域の人たちからもルームの存在を認められ受け入れられるようになってきたこと。	若者たちの抱える、生きづらさは、個人のなかだけにあるわけではなく、地域社会の問題でもあると考えるから。
⑥ 無題	地域の方を招待するクリスマス会で演劇を発表し、好評をいただいたことがルームと地域をつなぐきっかけとなった。	ルームの活動を外部に向けて発表する機会が限られているため、クリスマス会での発表を通して、ルームでの活動や利用者さんへの理解を示していただけのものになっており、毎年演劇を目的にクリスマス会に足を運んでくださる地域の方も増えたため。また、地域の方に発表する機会を持つという点で、演劇プログラムに参加する利用者さんのモチベーションアップにつながっている。
⑦ 公的劇場・ ホールとの コラボレーション	この「さいたま市若者自立支援ルーム」での演劇プログラムをきっかけとして、埼玉県の公的劇場ホールである「彩の国さいたま芸術劇場」との関係ができ、そのコラボレーションが少しずつ深まってきたこと。	(前略) 公的ホールとの関係を作り出すことは、芸術を地域社会に埋め込むというホールのミッションにとっても、また劇的空間や関係をもとに社会的包摂をはかるこのプログラムの目的にも合致するのではと思う。また、演劇プログラムを通じて、利用者の自立をはかるルームの目的からも地域に根ざした芸術活動とかかわりを深めることが出来るのはプラスになると思われる。演劇プログラムの実施者(講師、指導者)、自立支援ルーム、劇場の3者にとって、とても意味のある、有益なコラボレーションに、将来的にもなっていくのではないかと。(後略)

4 KPI 指標による評価

ルーム職員・ボランティア 6 名と青年劇場 1 名により、「利用者のチャレンジ精神」が演劇プログラムを通じてどの程度向上したかどうかを、1. 大いに低下した (1点)

2. 低下した (2点) 3. 変化なし (3点) 4. 向上した (4点) 5. 大いに向上した (5点) の 5 段階に尺度化して、レーティングしてもらった。結果は、表 4 のグラフの通りである。「変化なし (3点)」1名、「向上した (4点)」2名、「大いに向上した (5点)」4名で、平均 4.43 点となった。

KPI のレーティングに関しては、以下のようなコメントがあった。

- 参加者が時間や年度によって入れ替わることが多く、また変化に時間がかかることが多いので、変化しつつも、ドラスティックなものとはいえないのではないか。
- 自分は 4 点をつけたが、もっと改善できる可能性やポテンシャルはあると考える。
- 多くの利用者が、人前でセリフを読むだけでも無理な

5 演劇プログラムの見学

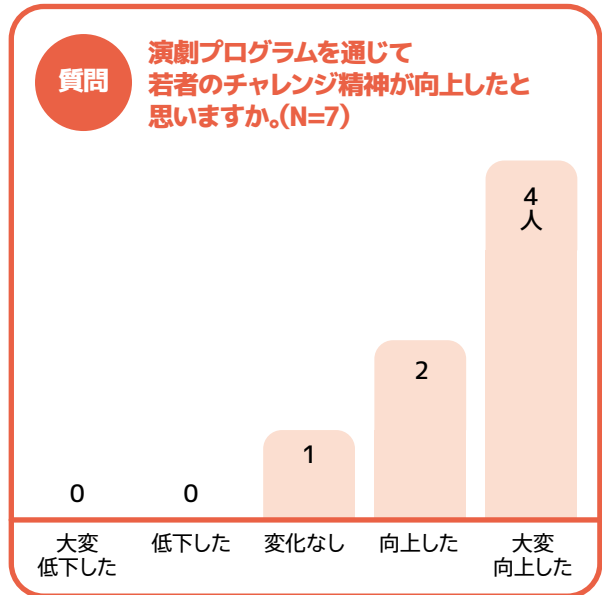
1 プログラム内容(12月8日)

この日の演劇プログラム参加者は、講師 3 名とルームボランティア 1 名、利用者 4 名であった。利用者は演劇など創作に関心はあるが、家庭環境の複雑さや不安定なメンタルなど「生きづらさ」を抱えているという。車座に座って自己紹介の後、2 名の利用者が持ち込んだ自作の台本を、利用者や講師・ボランティアで役割分担して演じることを順番に行った。また演じた後、感想を言い合った。利用者は皆、積極的にプログラムに参加し、生き生きと演じており、プログラムの進行に関する提案なども見られた。

2 講師の態度・姿勢

講師の利用者に対する姿勢に、劇団員としての専門家

表 4 KPI 調査結果:チャレンジ精神の向上



状況だったが、今ではかなり向上している。中には大きな変化のない人もいるが、一人一人少なからず何か変化していると思う。

- 他のプログラムと比べても、これほどわかりやすく利用者が変化したものはない。演劇プログラムの終了後は参加者に「最高の時間」として余韻が残っている。
- 演劇プログラムがルームの中に普通に存在しているという安心感があるから、いろいろ広がってきていると感じる。

を生かした指導およびソーシャルワークにおける対人支援と共通する態度をみとめた。前者は、利用者の台本や演技にプロ劇団員という専門家の立場からコメントし、それが説得力を持ち良い刺激になっているようだった。後者は、講師は利用者に行動を働きかけるが、強制はせず本人の判断に委ね、話を聞く際には積極的に共感を示し、台本や演技に関しては肯定的な言葉で励ましていた。これらは生活課題がある人へのソーシャルワーカーの視点で必要とされる! 相手の意思を尊重すること (自己決定) 相手の長所や強みに着目すること (ストレングス視点) 相手の持つ長所や強みを引き出すこと (エンパワーメント) といった姿勢とつながる³。講師は利用者の家庭環境などを考慮しながら、毎回プログラム後にふりかえりを行って、対応を決めているという。

6 まとめと考察

1 プログラム目的に関する、象徴的な多様な変化と目標達成が報告された

●参加した若者の意識や行動に起こった変化

初めは利用者の多くが、自己開示が苦手で、「自分には生きる価値がない」と感じていた者もいたが、演劇プログラムを通じ、脚本を書くこと、人前で演じること、そうしたことを議論することなどに積極的かつ主体的に取り組むことで、彼らの自己肯定感やコミュニケーション能力、チャレンジ精神が培われた、ことがわかる。その結果、希望の仕事に就職したり、NHK ラジオのインタビューに積極的に応じたりできる利用者も現れた。このような顕著な変化は利用者全員に均等に発現したわけではないが、講師によると「利用者の各人がそれぞれのペースで変化している」とのことである。これこそは、演劇プログラムの目標に掲げられていた成果である。KPI 指標である「チャレンジ精神」の向上は、5点満点で4.43点に達している。プログラムは効果的に目標を達成しているといえる。

●自立支援ルームの施設内に起こった変化

ルーム職員が、演劇プログラムに触発され、職員たちも自ら脚本を書き舞台を演じ、発表したことがある。「演じる楽しさを知るようになった」と、職員の世界観を広げる契機となった。また演劇プログラムがルームの中で他のプログラム利用者に知られ、ルームの「看板プログラム」となり、「演劇プログラムに関心があってルームに来る人が増えた」ことも語られている。特筆できる変化は新人ルーム職員が利用者との相互交流の中で、彼らへの対応が変化し、ソーシャルワーカーとして成長したことである。

●自立支援ルームを取り巻く地域社会に起こった変化

ルームと地域社会のつながりは一年に一度開催される「クリスマス会」が重要な役割を果たしている。会には、さいたま市長を含め地元の人々や、利用者の保護者が招待される。自分の息子や娘が人前で演技するのを観た保護者が「これまでの社会から遮断され、人生で何かをな

しとげたことがない」彼らが立派に芝居を行う姿に触れ、「自分の知らない一面を見て感動した」という意見が多く寄せられている。また、毎年継続的に開催していることで、ルームの地域社会における認知度を高める役割を果たしている。加えてルームと埼玉県公的劇場ホールである「彩の国さいたま芸術劇場」との関係ができ、そのコラボレーションが深まってきたことも付記しておく。

2 職員と利用者の相互成長など、想定外の変化や新しい価値の創造が起こった

プログラム目標に入っていなかった、想定外の変化の発現が、MSC 手法によって把握できた。ルーム職員と利用者が「支援する側・される側」だけの一方的な関係でなく、職員の支援で利用者が変化するだけでなく、職員も利用者との交流の中で、ソーシャルワーカーとして成長してきているという新しい関係性・価値が、演劇プログラムを通じて産み出されていることがわかった。ソーシャルワーカーに必要な資質として、経済学者アルフレッド・マーシャルの「温かい心と伶俐な頭脳」というフレーズが使われるが⁴、ルーム職員が獲得した「やわらかくも毅然とした対応」は、まさにこのことではないだろうか。

3 職員と講師の専門性と利用者に寄り添う姿勢が、プログラムの有効性を高めている

ルーム職員は、プログラムを通じて、ソーシャルワークに求められる態度を身に付けた。講師は、演劇の専門性を活かしながら、ソーシャルワーカーにも通じる態度で利用者向き合い活動を行った。このような職員や講師の利用者に寄り添う姿勢が、プログラムを効果的にする一要因となっている。

4 長期的・継続的にプログラムを行う重要性

変化が発現するまでには中・長期的な時間を要することがわかる。「変化しつつも、ドラスティックなものとはい

いがたい」とのコメントがあったが、一般に低い自己肯定感を向上させることは、一朝一夕では実現しない。演劇プログラムは活動開始から5年目である。Aさんは3年間通い続け、Cさんは2年間をかけて、さまざまな葛藤を乗り越えてゆっくりと変化が起こり、自己肯定感を高めてきた。講師によれば「大きな変化のない人もいるが、一人一人少なからず何か変化したと」いう。また青少年の孤立の背景や変化のプロセスは一人一人違うので、ルーム職員によるきめ細かい対応が求められる。その意味で、職員も時間をかけて成長してきたプログラムといえるだろう。また、大前提として、ルームの看板事業として演劇プログラムが普通にある安心感が広く利用者に浸透しており、希望する者が誰でも気軽に参加できる場として準備されていることが重要であったと考える。人間の意識や行動の変容を求めるプログラムは、時間をかけて粘り強く取り組む必要があることをよく表した活動である。

5 「演劇」という手法の有効性

利用者はルームという安心・安全な「居場所」において、自ら脚本を書き演じ表現する。それを講師や他の利用者との相互批評の場でわかちあい、励まし合う。利用者はこのプロセスを通じて自己肯定感を高め、チャレンジ精神やコ

ミュニケーション力を育てている印象をうけた。このような「演劇」を活用した手法・アプローチそのものが、プログラムの目的を達成する上で、効果的であったと考える。



「にほんごであそぼう」 在日外国人を対象とした 演劇ワークショップ 評価報告



1

背景・目的・ プログラム概要

本プログラムは、兵庫県小野市在住の外国人を対象として実施される演劇ワークショップ（以下WS）である。2018年度より実施しており、2019年度は7月から9月にかけて合計4回実施されたが、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大のため実施できなかった。2021年度は4回実施された。

1

小野市在住外国人に関する 課題

小野市の人口5万人弱に対して、市内在住の外国人は約30カ国から約907名（2020年1月）が在住している。そのうち、小野市国際交流協会が開催する日本語教室の登録者数は、小学生～50代の120～130名程度である。在住外国人が抱えている問題としては、以下のようなものがあげられる。

- 小野市の在住外国人は技能実習生として近隣の工業団地等で働く人々が多いが、ふだん、職場を越えて外国人同士、また日本人と親しく接することは少ない。
- 中には日本語の習得に熱心な方々も多く、小野市国際交流協会が主催する日本語教室や交流行事には多くの参加者がある。しかし、それら教室や行事に参加しない（できない）外国人もあり、地域社会から孤立している。

- 外国にルーツをもつ子どもについては、日本語による授業についていけず学校内で孤立してしまうこともある。特に思春期となると言葉の壁から引きこもりになっている子どももいる。

上記のような問題の一因として、地域の日本人と外国人がお互いに理解しようとする場所、コミュニケーションを取る機会が不足していることが考えられる。兵庫県立ピッコロ劇団、エクラ、小野市国際交流協会の3者は、日本語教室に参加していない人も集まれるような場所として本WSを企画した。

2

プログラムの目的

地域の外国人および職場や地域の日本人が集い、日本語と身体をつかった表現活動を行う。ふだんの仕事や日常生活では機会が少ないと思われる深く親しいコミュニケーションを体験してもらうことで、地域における外国人同士、そして外国人と日本人の相互理解、コミュニティづくりを促進する。特に日本の生活になじめない外国人やその子ども、家族の参加を促し、今後の地域社会への参加へとつなげ、日本人と外国人がいきいきと共生する地域社会の実現をめざす。4年目の2021年度のWSは外国人が親子で参加し、家族ぐるみで楽しめる場となることを目指した。

3

実施体制

以下3団体が主体となって協働する。また外国人が働く事業所の担当者、行政担当者の参加、連携をはかることを予定した。

- 地域活動団体：NPO 法人小野市国際交流協会
- 地域文化施設：小野市うるおい交流館エクラ (NPO 法人北播磨市民活動支援センター)
- 地域芸術団体：兵庫県立ピッコロ劇団 (公益財団法人兵庫県芸術文化協会／兵庫県立尼崎青少年創造劇場)

4

プログラム実施概要

- 内容：日本語を使ったコミュニケーションゲームや表現活動を体験。身近な生活を題材とした場面や風景、簡単な物語などを、グループで力を合わせて表現し、互いに鑑賞し合う。またこの場を利用して、市の防災センターから多言語 QR コードアプリ登録についての説明などを行う (市内ベトナム人住民による通訳つき)
- 対象：小野市および周辺に居住生活する外国人と、関係の深い職場や地域の日本人 22～46名
- 日程：2021年7月3日(土)：親子対象、
7月31日(土)：日本語教室生徒対象、
8月1日(日)：親子対象、
2022年1月16日(日) 大人対象、の4回実施。
- 講師：兵庫県立ピッコロ劇団員3名
- 会場：小野市うるおい交流館エクラ大会議室

2

2021(令和3)年度の調査の概要

1

評価の目的

評価の目的は、「演劇ワークショップ (WS) の影響で、外国人・日本人に起こった変化を、質的・量的に把握し、プログラムの有効性を検証するとともに、変化の詳細や背景にある要因を分析し、今後の活動に活かしていく」とした。

2

評価調査の概要

質的 (定性的) 手法である、MSC (モスト・シグニフィカント・チェンジ) と¹、KPI (キー・パフォーマンス・インディケーター) を併用した。また外国人への In Depth インタビューを行った²。このように質的調査と量的調査を併用することによって、バランスの取れた事実認識と価値判断を行えるように工夫した。以下に詳細を記す。

①質的評価手法 MSC による評価調査

調査手法は、質的 (定性的) 手法である、MSC (モスト・シグニフィカント・チェンジ) を採用した。

調べる時間の範囲は、「WS に参加する以前と以後の比

較」とし、変化の領域は以下の3つとした。調査者は WS に参加した外国人と日本人に 2021年11月20日と2022年1月15日にインタビューを行った。

- 演劇 WS に参加して外国人に起こった変化：外国人5名および日本人3名が対象
- WS に参加した外国人の周りの人 (家族・友人) に起こった変化：外国人4名が対象
- WS に参加した日本人に起こった変化：日本人3名が対象
1月16日にピッコロ劇団から5名 (田窪、本田、菅原、木村、河東)、小野市国際交流協会から4名 (河嶋、藤田、小西、永峯) の参加で収集したエピソードから「最も重大な変化」を選択する会議を行った。

②量的指標 KPI の活用

またプログラムの有効性を測る定量的手法として、KPI (キー・パフォーマンス・インディケーター) を併用した。KPI は、日本語に訳すと「重要業績評価指標」という意味で、目標を達成する上で、その達成度合いを計測するための定量的で最も重要な指標のことである。本プログラムの目的の中から、KPI を利用者の自己肯定感につながる「外国人の世界 (観) が広がったか」とした。

1: MSC 手法の詳細は、「参加型・質的評価手法 MSC の活用」を参照されたい。

2: 質的調査で使用される詳細なインタビューの方法で、インタビュアーにより、解釈された情報提供者の経験を理解することを目的とする。

③ In Depth インタビュー

ベトナム人 Q さんのライフストーリーを聴きとる In Depth インタビューを 1 月 15 日に実施した。

このように質的調査と量的調査を併用することで、バランスの取れた事実認識と価値判断を行えるように工夫した。

3 MSC 手法による評価

1 演劇 WS に参加して外国人に起こった変化

演劇 WS に参加して外国人に起こった変化は、外国人から 5 名 (1 ~ %) と日本人から 3 名 (8 ~) の 1 編ずつ、合計 8 編が収集された (表 1)。外国人が語った「重大な変化」から説明する。「災害に関する情報」は、WS でたくさんの外国人と友達になれたことに加え、市の防災センター職員から「外国人向けの災害情報へのアクセス方法」を入手

できたことが良かった、という内容である。「外国人同士の異文化交流」は WS を通じて「母国以外の外国人と交流でき喜びになった」というものである。知らない外国人と知り合うだけではなく「ベールをかぶった女性にびっくりした」など、WS が異なる文化の交流の場となっている点が評価された。#「話したことない外国人と話せた」は職場で一部の外国人としか話したことのない女性が、WS の場で色々な国の人と話せて嬉しかった」という話である。彼女は日本語教室の生徒でもあるが、他の外国人との交流に刺激を受けて、日本語学習に対するモチベーションも向上しているとい

表 1 演劇 WS に参加して外国人に起こった変化

タイトル: 話し手	重大な変化	重大に思う理由
①災害に関する情報: L さん (ベトナム) 29 歳	<ul style="list-style-type: none"> ● たくさんの外国人 (フィリピン人、ブラジル人) に友達になって話したのが良かった。 ● 地震・大雨 (災害) に関する情報をもらった。 	今後、生活するときに困っていることは、相談できるからいいことである。情報をもらってよくわかった。
②外国人同士の異文化交流: H さん (ベトナム) 34 才	初めてで 2 日間参加した。それまでは日本語教室の他の生徒と話すことがなかったが、イベントの後は、仲がよくなり、話をしたり、一緒に遊びにいったりした (協会のバス旅行など) 子供達とも話した。	いろんな国の人と友達になって、その国ことを教えてもらえたから (インドネシア、カンボジア) インドネシアの女性がベールをかぶっていてびっくりした。
③話したことない外国人と話せた: I さん (ベール) 60 歳	ゲームしているのを見て遊ぶのが楽しかった。いろんな国の人 (カンボジア、インドネシア、ベール、日本、フィリピン、中国、ベトナム) 一緒に遊んだ。	みんなで楽しくするのが嬉しい気持ちになったから。それまでは他の外国人のおしゃべりすることはない (仕事では少ししゃべる)
④ゲームが楽しかった: E さん (フィリピン) 13 歳	たくさんの人々に出会って、ゲームをしたので、楽しかった。	
⑤競争だと燃える: Q さん (ベトナム) 32 歳	家族で参加した。色々な国の人と交流できて楽しかった。	「だるまさんが転んだ」など上手に参加者の競争心を刺激してくれたから。
⑥親密な関係ができた: K さん (日本人ボランティア講師) 77 歳	WS でゲームをした後、(日本語教室で) 自分が担当していない生徒が、頻りに挨拶してくれる、目が合うとニコリしてくれるなど、親密な関係ができてきた。	それまでは担当している生徒を教えていけば問題はなかったが、WS を契機にこれまで接触がなかった生徒と精神的なつながりができ始めた。
⑦チームでは話さなくてはいけない: F さん (日本人ボランティア) 18 歳	日本語教室だと外国人同士で言葉の壁がある。WS のゲームでは「伝えなくてはいけない」状況になるので、伝える意識が高まった。コミュニケーションとやすくなった。	演劇 WS という手法。集まってチームを作ったら、中で話さなければならない。
⑧進行が上手: O さん (日本人ボランティア講師) 72 歳	最初は戸惑いがあったが、だんだん盛り上がり、生き生きと参加していた。	ピッコロの進行が上手だったから。

う♪「ゲームが楽しかった」の話し手は中学生だが「WSのゲームを通じてたくさんの人とは遊んで楽しかったという内容で#に近い%「競争だと燃える」は家族で参加し「講師の巧みなゲーム進行によって、熱中して参加できて楽しかった」というものである。次に日本人から見た外国人の「変化」を紹介する&「親密な関係ができた」は日本語ボランティア講師によるものだが「それまでに言語教室で自分が担当している生徒を教えているだけだったが、WSを契機に担当していなかった生徒と精神的なつながりができた」と日本人と外国人との関係性の変化について語られた。『「チームでは話さなくてはいけない」は「WSのゲームで知らない外国人とチームを組んだら、どうしても話をしなくてはいけない。それが楽しく日本語をしゃべる契機になる」というWS手法の効果に関する評価である。『進行が上手』も講師の劇団によるWS進行に関する高い評価である。これら8編の「重大な変化」の中から、選択会議において「災害に関する情報」を最も重大な変化に選出した(表1下線)。選出理由は「WSは交流だけでなく、外国人に災害時の情報入手手段などを伝えるといった目的もある。それが現実に達成でき、外国人に安心感を与えられたことは素晴らしい」という理由であった。実際防災センターのアプリの外国人登録者数は2021年10月で、56件であるが、その中で演劇WSでのお知らせ後は10件増加したとのことであった。

2

外国人の周りの人に起こった変化

次にWSに参加した外国人の周辺の人(家族・友人)に関する変化を検討する(表2)。「娘の学校の情報」は「自分の娘が日本の学校に通う手続き上の情報を、WSでできた人間関係から入手できた」また「日本に来て寂しくしていた娘が、WSを楽しんでいた」というものである。「より近い友達に」はどちらかというと本人の変化である#「家族で楽しむ♪「子供が楽しむ」の2つは家族ぐるみでWSに参加して楽しかった、という感想である。これらの中で、「娘の学校の情報」を最も重大な変化のエピソードとして選択した(表2下線)。選択理由は、(1)!とも重なるが「WSの目的は交流して楽しむこともあるが、同時に実質的なメリットがあることをめざしている。外国人にとってわかりにくいと思われる学校に関する手続きの情報が入手できたことは意味がある」ということであった。

表2 外国人の周りの人に起こった変化

タイトル: 話し手	重大な変化	重大に思う理由
①娘の学校の情報:Lさん(ベトナム)29歳	<ul style="list-style-type: none"> ●娘の学校についての情報もらった(手続き) ●参加した娘がいろいろな人と知り合っていて楽しんでいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ●それまではどうして良いかわからなかった。 ●娘は、日本に来てから寂しくしていた。
②より近い友達に:Hさん(ベトナム)34歳	お互いにより近い友達になり、いろんなことをよく話すようになった。イベント前はよく知らなかった。	
③家族で楽しむ:Eさん(フィリピン)13歳	自分の弟、母親、祖母も参加して楽しんでいた。	
④子供が楽しむ:Qさん(ベトナム)32歳	自分の子供が楽しく参加できていた。	家族一緒に参加できたから。

3 日本人に 起こった変化

WS や日本語教室に講師などで関わる日本人に起こった変化も調べた(表3)。「力になりたい」は「市内に住み、がんばっている外国人について以前は知らなかったが、知った以上は彼らの力になりたい」という意識の変化である。「自信がついた」は高校生ボランティアによる「英語が苦

手でも WS などのボランティアを通じて、外国人とのコミュニケーションに自信を持った」という内容である。「日本語は難しい」は「日本語講師として正しく日本語を教えたい」という自覚の向上に関するものである。これらの中から、「自信がついた」を最も重大な変化のエピソードに選出した(表3下線)。選出理由は「WS は、最初は外国人のみが対象だったが、後に日本人も対象に含めた。ボランティアとしての参加を通じて、本人が自分の中にあった苦手意識・ハードルを乗り越えたことが素晴らしい」だった。

表3 日本人に起こった変化

話し手	重大な変化	重大に思う理由
①力になりたい:Kさん (日本人ボランティア 講師) 77 歳	ここに来るまでは小野市に住む外国人とつながりはなかったが、彼らの手伝いができたらいいと思うようになった。スケジュールをこなすだけでなく、前向きなコミュニケーションができるようになりたい。	●小野市に住む外国人を知らなかったが、多くの外国人がいて、一所懸命働いていることを知ったから。
②自信がついた:Fさん (日本人ボランティア) 18 歳	普段学校では積極的だが、英語が苦手で外国人が苦手だった。ボランティアをしてから「英語」ができなくてもコミュニケーションできるという自信がついた。	外国人が苦手という壁を乗り越えるためにボランティアを始めた。
③日本語は 難しい:Oさん (日本人ボランティア 講師) 72 歳	WS に対しては特にはない。日本語教室の講師をやった経験からは、以前より日本語について勉強するようになったのが大きな変化。	細かいニュアンスの違いを教えるのは難しい。また教え子がスピーチコンテストで活躍したのが嬉しかった。



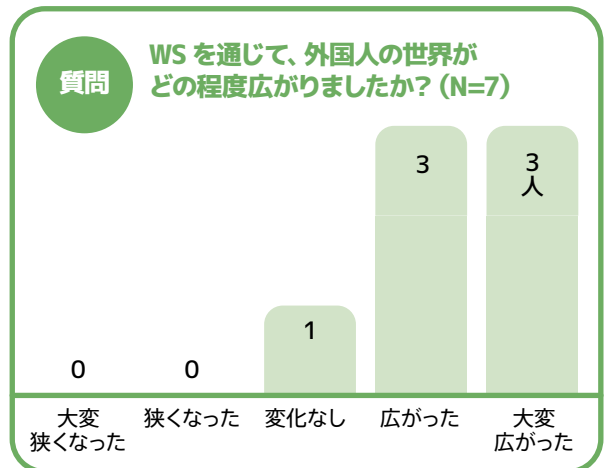
4 KPI 指標による評価

WS を通じて「外国人の世界がどの程度ひろがった」かを、KPI として、1. 大変狭くなった (1点) 2. 狭くなった (2点) 3. 変わらない (3点) 4. 広がった (4点) 5. 大変ひろがった (5点) として、MSC 調査を行った外国人 5 名と日本人 2 名合計 7 名に、認識を尺度化してレーティングしてもらった。平均は 4.29 点であった (表 4 とグラフ)。

また KIP 調査に関して以下のコメントが寄せられた。

- 徐々に広がっているが、ものすごく広がっているわけではない (日本人)。
- WS は面白かった。前は友達少なかった。ベトナム人とベトナム語だけでしゃべっていた (外国人)。

表 4 WS を通じて、外国人の世界がどの程度広がったか



- WS をもっと広げたいと思うので、5ではなく4とした。小野市にたくさん外国人住んでいる (外国人)。
- 日本語教室に参加しているの間では広がっているが、教室に参加していない人は WS に来ない。そのような人が参加すれば、もっと広がるのではないかと (日本人)。

5 Q さんへの In-Depth インタビューの概要

演劇 WS にはさまざまな外国人が参加しているが、典型的な一例として 2017 年に来日した、Q さんのライフストーリーを聞き取る、In-Depth インタビューを実施した。結果は以下の通りである (表 5)。

このライフストーリーから、日本の技術に憧れ来日した

が、言葉の壁で苦労したこと、外国人支援の日本語教室 (札幌・小野市) の活動に助けられたこと、日本語教室と演劇 WS の両方が生活の質を高めるために有効であったこと、などが読み取れる。

表 5 ベトナム人 Q さん (32 歳) のライフ・ストーリー

故国での生活	ベトナムの N 県で、エンジニアとして土木建築の仕事をしていた。父は退職して、母はマカオで仕事している。妻と娘が 2 人。1 人は日本で生まれた。
日本へ来た経緯	妻が技能実習生で日本へ行き、良かった話を聞いたので、自分も日本行きを決めた。また日本の文化や技術を学びたかった。2017 年に 1 人で来日。札幌の設計会社で働く。家族は翌年来た。
日本に来て困ったこと	日本語が喋れないこと。90% できない。仕事にも支障があった。漢字などすごく難しい。
困ったことの克服方法	本やアプリで日本語を独学した。札幌のボランティア講師にも教わった
小野市と国際交流協会との出会い	2019 年 3 月に小野市に来た。ベトナム人の友人に紹介してもらい、日本語教室に昨年夏から参加している。わからない点や専門用語を説明してくれるので、大変役に立っている
演劇 WS	他の外国人と知り合うことができ、また家族で楽しく参加できてよかった。
現在の様子	建築土木の国家試験の一次をパスした。2 次も受験し結果まちである。
日本の良いところ	20 年後ベトナムに帰り、日本で学んだ技術を若い人に伝えること。
演劇 WS	意識の高さ。ルールを守る点、技術が高い、町が安全なところ
日本の悪い点	言にくい、差別みたいに感じるものがたまにある。外人だと陰で悪口言ったり、挨拶しても返事なかったり。日本語教室の人にはそれはない。

6 まとめと考察

1 プログラム目的に関する、象徴的な多様な変化と達成が報告された。

①演劇 WS に参加して外国人に起こった変化全体を通じて、それまで職場などで例えば「ベトナム人とベトナム語だけでしゃべっていた」外国人や、日本語教室に参加していても「担当の日本人講師と話すことが中心だった外国人」が、WS を通じて「他の国から来た外国人など知りあい、相互に楽しく交流」したり、「異なる文化を知る機会を得た」りして、彼らの世界を広げていく効果があったことがわかる。また WS は楽しい相互交流の場であるだけではなく、「地震・大雨（災害）に関する情報をもらった」「娘の学校の手続きについてわかった」というように、外国人が日本の地域社会で安心して生活していくために必要な実用的情報を得る機会を提供していることがわかった。

②WS に参加した外国人の周りの人（家族・友人）に起こった変化「一緒に参加した娘が楽しんで」「家族ぐるみで参加できて楽しかった」など、WS がやさしい日本語で、かつ講師によるたくみな進行で行われるため、大人以外の参加者も一緒に楽しい時間を過ごせたようだ。今年から WS の参加者に大人だけでなく親子参加を加えたが、期待通りの成果がでていることがわかる。

③WS に参加した日本人に起こった変化 ボランティアとして参加している日本人にも変化があった。「市で暮らす外国人のことを知らなかったが、がんばる彼らの力になりたい（日本語教室講師）」「外国人とのコミュニケーションが苦手だったが、自信がついた（ボランティア）」など、日本人側にも国際交流と異文化理解の学びの場を、WS が提供していることがみてとれる。

2 日本語教室と演劇 WS 双方が有機的に相乗効果をもたらしている。

演劇 WS の参加者は、市の日本語教室の場で誘われたことをきっかけに参加することが多いようである。インタビュー結果に基づいて、日本語教室と演劇 WS を通じて、どのように外国人の世界が広がり、生活の質が高まっていくのか、そのプロセスをイメージを図示してみたい。

①最初来日してしばらくした段階では、外国人は相互に距離をおいて生活しており、職場以外の日本人や外国人同士との交流は少ない。交流があっても言葉が通じる同国人同士が中心である（図1）。Qさんのように日本語が不自由で不便を感じている場合も多いと考えられる。

②日本語力を高めるために、日本語教室へ参加する。その参加によって、担当の日本人ボランティア講師との関係ができる。調査者が日本語教室を見学したところでは、講師1名に1~2人の外国人がつき、言葉の勉強だけではなく、生活面での相談なども行われていた。このように、日本語教室で日本人講師と外国人との交流が実現し、相互の信頼関係ができる（図2）。しかし、異なる外国人同士の交流は限定的である。

③外国人が演劇 WS に参加する。WS のゲームでは一緒になった他国の外国人ともコミュニケーションをとらなければならない。そのことが日本語を話すモチベーションになるとともに、これまで交流のなかった他の外国人と知り合い、異なる文化について知る機会となる。参加者が WS 後に連絡先を交換したりして、彼らの世界がさらにひろがる（図3）。

④また WS では市の防災センターの活動の紹介の時間などもある。子供の学校に関する情報にアクセスできるようになったり、外国人は安心できる生活に必要な情報を得る機会にもなっている（図4）。

このように日本語教室と演劇 WS の両方が効果的に作用して、外国人の世界を広げ、安心・安全な生活を保証するために相乗効果をあげている。

3 今後の展望と課題

インタビューした外国人に「今後、『にほんごであそぼう』に望むこと」を聞いた。その結果、「また参加したい（ペルー、フィリピン）」といった継続的な参加を希望する声や、「日本語教室だけで（他の外国人と）友達になれるわけではないので、WS は大事である。続けて欲しい（ベトナム）」といった声があった。また『「にほんごであそぼう」は良いイベントなので、日本全国でひらいてほしい（ベトナム）」と、他の地域でも開催したら良いという提案があった。実際 1月15日の WS には、近隣の加東市からの見学者があり、1月

30日と、2月6日に類似のWSを開催予定だった。このような小野市のWSの評判を聞いて活動が面的な広がりを持ち始めている。

日本語教室に参加していない外国人が来られることが、WS開催の目的の1つであった。しかし、「日本語教室に参加している人の中では広がっているが、教室に参加していない

人はWSに来ない」との意見があるように、WS参加者の大部分は、日本語教室の受講者であるようだ。「小野市には(W.S.を知らない)もっと外国人が住んでいる」という状況がある。国際交流協会もWS広報に努力をしているが、日本語教室に参加していない外国人のWS参加者をどうやって増やしていくかが今後の課題だと考える。

図1 外国人どうしが離れている



図2 日本語教室で日本人講師と関係ができる



図3 WSで外国人相互の関係ができる

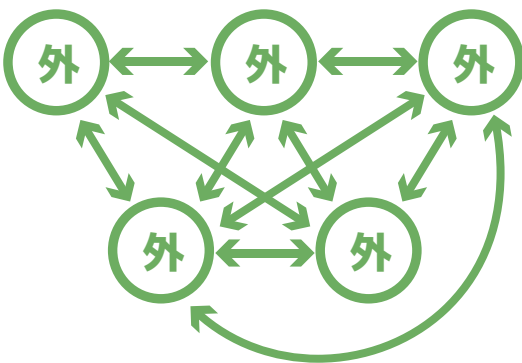
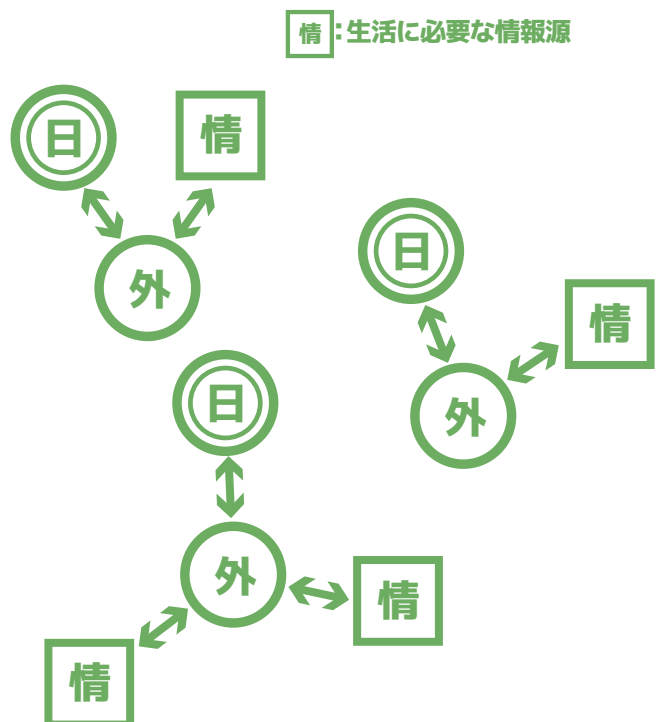


図4 生活に必要な情報を得る



3: 加東市のWSは新型コロナウイルスオミクロン株の感染拡大で令和2年度に続いて中止となった。

華陽フロンティア高校 演劇ワークショップ 評価報告

1

背景・目的・ プログラム概要

1

華陽フロンティア高校が 演劇ワークショップ (WS) を 実施した背景

！ 小学校、中学校時代から不登校または不登校傾向のある生徒が多い。その為、一部の生徒は教員や生徒とのコミュニケーションが不十分であったためか、欠席、遅刻、そして早退が多い。要因の一つとして考えられるのは、学校が生徒にとって心地よい「居場所」になりえていなかったと考えられる。

” 一人親家庭の生徒が多く、また、兄弟の母親や父親が異なっていて、家族関係が複雑な生徒も多い。生徒一親一学校との連携に難しさがある。

＃ 3部制になっていて、全日制に行けなかった生徒が多いことから、自己肯定感に欠ける生徒が多い。

2

プログラムの目的

- コミュニケーション WS を通して、生徒と生徒、生徒と教員がそれぞれ、相互発見をして、つながりを深くする。
- 他者に対する集中力あげ、相手の話を聞き、相手のことをよく見て、お互いの信頼関係を築き上げる。
- WS を通して集中力と自分を他者に対してゆるやかに開く体験をさせ、学校がそれぞれにとっての「居場所」となるようにする。

3

対象

1年生

4

内容

- 第1回：導入としてグループの仲間を意識し、和んだ雰囲気形成のため、シアターゲームなどおりまぜて体を動かしながら他者を理解する。
- 第2回：他者の動き、心情に集中するとともに自分の気持ちを表現する。言葉と身体表現などを使い、他者との関係性を構築する。
- 第3回：言葉以外の方法で相手を認識し、コミュニケーション力を高める。

5

実施体制

以下、2団体が協働する。

- 岐阜県立華陽フロンティア高等学校
- 文学座（講師）

※上記の計画で、2021（令和3）年度において、年度初頭から3回のWSを実施する予定であった。しかしながら実際は、新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言の発令によって延期され、1回目10月12日～14日及び2回目12月15日～17日の2回のみの実施となった。

2

2021 (令和 3) 年度の評価調査の概要

1

評価の目的

評価の目的は、「演劇ワークショップによる影響で、生徒に起こった変化を、質的・量的に把握し、プログラムの有効性を検証するとともに、変化の詳細や背景にある要因を分析し、今後の活動に活かしていく」とした。

2

評価調査の概要

質的 (定性的) 手法である、MSC (モスト・シグニフィカント・チェンジ¹) と、KPI (キー・パフォーマンス・インディケーター) を併用した。また調査者による教員へのキー・インフォーマント・インタビュー²をオンラインで行った。このように質的調査と量的調査を併用することによって、バランスの取れた事実認識と価値判断を行えるように工夫した。

①質的評価手法 MSC による評価調査

第1回のWSが実施された2021年10月14日の後に教員12名に依頼して、質問用紙を用いて、教員の目から見た生徒の変化について情報を入手した。調べる時間の範囲は、「今年の演劇ワークショップ (WS) を始めてからこれまでの間 (WS 実施前と実施後)」とし、変化の領域は以下の2つとした。

- 生徒の自己表現・自己肯定感の向上に関して起った変化

- 生徒のクラス・先生・地域とのコミュニケーションに関して起こった変化

その後、12月21日及び22日に講師の文学座3名 (西川、岡本、横山:敬称略) の参加で、収集した変化のエピソードから「最も重大な変化」を選択するオンライン会議 (データ分析) を行った。(回答内容については原文のまま掲載)

②量的指標 KPI の活用

またプログラムの有効性を測る定量的手法として、KPI (キー・パフォーマンス・インディケーター) を併用した。KPI は、日本語に訳すと「重要業績評価指標」という意味で、目標を達成する上で、その達成度合いを計測するための定量的で最も重要な指標のことである。本プログラムの目的の中から、KPI を生徒のコミュニケーション力の基礎となる「生徒の自己肯定感が向上したかどうか」とした。

③キー・インフォーマント・インタビュー

プログラムによる影響を調べる評価評価は、本来ならばWSを計画通り3回実施した後に行うことが望ましい。しかしながら上述のように新型コロナウイルスの感染拡大よりWS開催が遅れ、MSC評価とKPI調査を実施できたのはWSを1回のみ実施した時であった。その後、2回目のWSが12月15日～17日に行われたため、生徒がWSに2回参加した後の変化を調べるため、教員の小林氏へオンラインによるキー・インフォーマント・インタビューを2022年1月31日に行った。

3

MSC 手法による評価

1

生徒の自己肯定感の向上に関して起こった重大な変化

この領域に対しては、12編のエピソードが収集された (表1)。「無題」(「声」#「他者に何かを発信すること」&「無題」(「声を出す姿を見ることができた」+「会話も聞き取れない生徒が・会話すら難しい生徒には

」の6編は、「生徒が声を出したり他者に視線を送ったりなど、コミュニケーションの基本となる行動をWSによってできるようになった」ことや「みんな前で声を出す体験をする場を提供した」ことが共通して報告されている。「声を出していなかった生徒が声を出したり、笑う、応援するきっかけになったり成長できた」ことがあり、「皆の前では声を出せないことが多い。WSで後押しをするとできるようになる」「これらは普通の授業では教わらない」ところ

1: MSC 手法の詳細は、「参加型・質的評価手法 MSC の活用」を参照されたい。

に意味があったとされた。『失敗した時の切り替えの仕方』に関しては、「言い訳するのは、認めてもらいたい行動といえる。失敗して悔しく思うのも一つの変化。この場では何を言っても良いと思えたのではないか」というコメントがあった。『仲間への声掛け』は「対人行動が苦手な子だったが、皆に声をかけられて、なんとか自分で解決しようとする努力・行動する姿が変化のきっかけになった」点が評価された。『勇気』は「新しい関係をつくる契機。一人でやりにくくても皆だとやりやすい」とコメントがあった。『+』に関しては「変化は認められない」という回答であったが、「一般にWSの1回実施のみで大きく変化することはない。積み重ねが大切。また変化に個人差がある」と2回目以降の効果に期待する意見があった。『-』では「継続していくことで、生徒の経験値を高めていくことが大切」について「自分の力で成功体験を積んでいか

ないと向上できない」ことは、「その通り」であるが、そのためにも「中長期的に自分で育つことのきっかけを与えるのがWS。一瞬でもこれまで超えられなかった壁を越える、という発見を繰り返すことが大切である」というコメントがあった。最終的に最も重大な変化は、「声」と#「他者に何かを発信すること」の2篇が選ばれた(表1下線)。選択した理由は、「声を出すこと、視線を送ることは人と関わる基本だが、できない生徒が多い。ゲームを通じて変わるきっかけとなった。皆の前で声を出す、相手の目をみて話すことは大きな変化。人の話をきけるようになる。小さな変化ではあるが、最初のきっかけとして意味がある」また『失敗した時の切り替えの仕方』『勇気』の2編は、「傷つきたくない、という自分の防御の壁を取り除いて、人と関わるきっかけとなった」ことに意味があるとして次点になった。

表1 生徒の自己表現・自己肯定感の向上に関して起った変化

	重大な変化	重大に思う理由
① 無題	少人数の教室で、1対1ではあるが、普段あまり話すことをしない生徒が、授業の時間に質問をすることや自分の考えを述べるできるようになってきた。	自分の考えていることを言葉で表現することをできるようにするには、時間がかかることであり、勇気のいることだから。
② 声	特別な変化は感じていませんが、普段自分からコミュニケーションを取ることがない生徒が円になり自分の名前を叫ぶシーンでは、しっかりと声を出せていた。	声を出すことはコミュニケーションの基本だと思うから。
③ 他者に何かを発信すること	ゲーム中という限られた条件の中ではあるが、普段話したことのないクラスメイトに向かって声を出したり、視線を送ったりできたことは変化だと思います。	声はもちろんのことですが、視線を通じてコミュニケーションをとれるようになることは生徒にとって有益だからです。
④ 失敗した時の切り替えの仕方	全体を通して思いついたことをすぐに言葉にしてしまう傾向があった。しかし、全体の進行の妨げになってしまうので、西川さんをはじめとする劇団員の方の声掛けで切り替えを早くすることができた。ただ、ゲームで失敗してしまうと言いつつすぐに言っていた。また、授業では苦手な範囲の問題演習(漢文の書き下し文を作る)の際に、「分からないからやらない」と言って諦めてしまうことがあったが、人に聞くことで何とかやり遂げようとする粘り強さが出ていた。	承認欲求の強い生徒で、失敗した時には頑なに「もういやだ、やらない」と言ってしまう。また多動傾向があり、思いついたことをすぐに発言してしまう。今回の演劇WSでも思いついたことを発言する機会が多数あったが、西川さんの声掛けで速やかに切り替えることができていた。
⑤ 仲間への声掛け	ウインクラーゲームにおいて、探偵役になった生徒はいつも1人で行動していた。普段一緒に行動していないにも関わらず、「頑張ってる」とみんなが声をかけていた。	探偵役という注目を集める役になってしまった相手を気遣うことは、声をかけた生徒の成長にも繋がるし、声をかけられた生徒もクラスの一員であるという意識が芽生えるから。
⑥ 無題	特に重大な変化はない。しかしながら、普段ほとんど声を発しない生徒にとってみれば、珍しく声を出す機会になっていたため、今後に期待している。	いつまでも話さず塞ぎ込んだままでは、後々困ることが目に見えているため。
⑦ 勇気	生徒の中には普段から積極的に話ができる明るい子や、ほとんど話することのない物静かな子がいたりします。今回のWSの中で、いつもは物静かな子がみんなにつられて「がんばって声を出そう、一緒に参加しよう」と勇気を出して行動を起こしていた。	ひとりではやりにくいこともみんなで同じ行動をすると個々の部分が薄まり、やりやすくなり、ちょっとした勇気が生まれ、実践することでそれが少しの自信になり次への一歩につながるから。

2:「キー」核となる「インフォーマント」情報提供者に対する「インタビュー」面談による聞き取り、である。研究対象となる社会、文化の一員であり調査者が知りたい事柄に精通し、概念、言語、世界観、具体的事例などに関する確かな表現ができる人(情報提供者)のことを指す。

表1 生徒の自己表現・自己肯定感の向上に関して起った変化

	重大な変化	重大に思う理由
⑧ 声を出す姿 見ることができた	まだ、1回なので特段大きな変化というものはないかと思いますが、自己表現が苦手な生徒も演劇ワークショップの間は声を出して参加している姿があったので、生徒の中で「声を出す」ことについての抵抗感が少し、なくなったのではないかと思います。	自分のクラスでは人前で声を出すことが極端に苦手な生徒が何名かいます。当初はそのような生徒たちが全員参加できるのかとても不安でした。その為、上記の変化が重大だと感じました。
⑨なし	後半のみの参加でしたので、変化は感じられませんでした。	
⑩ 第1回演劇 WS	参加していたメンバーは楽しそうだったが、向上という点では変化はなかった。	
⑪ 会話も聞き取れない 生徒が・会話すら 難しい生徒には	演劇 WS 中に、声を出して行うものがあったが、これまで、会話の声すら聞き取るのが難しいくらいの大きさしか出していなかった生徒が、会場全体に聞こえるくらいの大きさの声をしていたのが印象的であった。ただ、授業後は元に戻ってしまっていたので、一過性でなく今後も続いていくようにしていきたい。 場面緘黙症の生徒にも同じようなプログラムの参加を求めていたが、問いかけに対して顔き程度しかできないのでその問いかけにもうまく反応できず、全体の前で問い詰められるような形になってしまい、その後のプログラムに参加しにくそうであった。	入学当初に自己表現が苦手であると話していたため、自分から発信することが今年度の目標であった。なかなか、自己表現ができていなかったが、今回の件で1つ殻を破るきっかけになるような気がしているため。事前に情報として、講師には提供していたが、成長と配慮の線引きの難しさを感じた。
⑫ 無題	生徒は恥ずかしがらずに自分のことを相手に伝えようとする大切さは学べたと思うが、それが実生活の自己表現につながっているかどうかはわかりません。自己肯定感はこのような形のワークショップで向上させることは難しいと思います。本校の生徒は様々な経験をしているので、	自分のクラスでは人前で声を出すことが極端に苦手な生徒が何名かいます。当初はそのような生徒たちが全員参加できるのかとても不安でした。その為、上記の変化が重大だと感じました。

2 生徒のクラス・先生・地域とのコミュニケーションに関して起った重大な変化

この領域に関しては、9篇(表2)が集まった!「無題」は、普段は会話をしない少人数のクラスが、「ゲームを通して、クラス4人のコミュニケーションがとれた」点に変化とされた。「距離感」は、生徒が行うゲームに教員が参加して起こった変化である。「先生が入ると生徒はもりあがるので、先生が入ることは効果的である。生徒が教師の意外な側面を発見したりする」と意見があった#「ピンポンパンゲームに取り組む姿」では、「間違えていても気にせず、率先して自ら取り組んでいる様子が見られ!」¹⁾ 攻めて失敗するのはいいこと”を実践して学んだ。最初生徒は『なんでこんなことやるの?』と思っているが、やってみると負けても楽しそう」な様子が報告された。\$「無題」に関しては「新しい人間関係の形成にはつながっていない印象がある」とのことだったが、講師によれば「変化の発現はクラスごとで差がある。お互いの新しい面を発見することが変化につながる」とのコメントがあった。%「思いやり」は「自然に他者との新しいつながりができた。やさしさを感じる」との意見があった。&「珍しい組み合わせが見られた」は

「以前はあまり話すところを見なかった生徒同士が話すようになったことは、大きな変化である。ゲームを通じて交流しなければならない状況にすることで、クラスメートの新しい面を知ることができる」とのコメントがあった。!「ピンポンパンゲームでの出来事」は「教員が参加することで、先生と生徒の間の距離感が縮まった。普通は両者の間にハードルがある。普段一緒にいる大人=先生が同じ目線に入ることは大事。生徒も変わる」とにつながる意見があった。() は特に変化は観察できなかった、という内容だが、講師からは「1回目で劇的に変わることは少ない。3回程度が必要である」と経験に基づいた発言があった。議論の結果、最も重大な変化に「距離感」と「ピンポンパンゲームでの出来事」2篇を選択した(表2下線)。選択理由は、「もともとハードルが教員と生徒の間にあったが、ゲームを通じて、壁が取り払われてきた。WSのゲームに先生が参加することが大事である」また「本来はもっと年度の初期からWSを3回行なう計画であったが、コロナ禍のためスケジュールが遅れた。生徒の人間関係がゼロレベルでお互いレッテルのない状態で行う前提で設計されたWSであったので、年度の後半になって、ある程度人間関係ができたからやっても効果が半減する」とスケジュールの遅れを残念に思うコメントがあった。

表2 生徒のクラス・先生・地域とのコミュニケーションに関して起った重大な変化

	重大な変化	重大に思う理由
① 無題	相手のミスにも反応する姿があり、クラスとしての一体感を感じることができた。	少人数のクラスのため全員で会話をする姿を見ない。しかし、WS内で全員が言葉を発することができ初めてクラスとしての活動ができたと感じたから。
② 距離感	普段教員が話しかけてもあまり反応がない生徒がピンポンゲームの際には躊躇することなく何度も教員を指名している姿があった。しかしその後の生活の中での変化は見られなかった。	教員との壁が薄くなることで、コミュニケーションが取りやすくなり、結果として生徒にとって利益になると思うから。
③ ピンポンゲーム に取り組む姿	ピンポンゲームに全力で取り組んだが、失敗してしまい顔を赤らめていた。その後の授業では、問題演習(漢文の書き下し文を作る)を間違えていても気にせず、率先して自ら取り組んでいる様子が見られた。しかし、授業以外の場では自分からクラスメイトと交流を取ろうとする姿は変わらず見られなかった。	不登校傾向の生徒が、半年間最低限のコミュニケーションしかHR担任やクラスメイトと取ろうとしていなかった。普段はミスが無いように慎重な行動をとることが多い印象だったが、西川さんをはじめとする劇団員の方、HR担任、クラスメイトの全力の取り組みに引っ張られる形で、勢い良くゲームに取り組み失敗してしまった。自己を抑えてしまう傾向が多い生徒だが、失敗を恐れずに果敢に取り組んでいたから。
④ 無題	新しい人間関係の形成にはつながっていない印象がある。演劇WSの中で、普段は目立たない生徒が輝くようなシーンが見られたため、グループ内での役割の変化が生じていることを期待している。	同じグループ内であっても、役割の変化によって新しい自分の発見につながると考えているため。
⑤ 思いやり	自分たちのグループが終わり、他のグループを見学しているときに明るく元気な生徒が物静かな生徒の肩をマッサージしていた。おそらくゲームの中で緊張していたのを察してほぐそうと思い、行動したのだろう。	同じグループでゲームを行い、「緊張してうまくできていないなあ」とその中で気づき、自然に行動していたこと。
⑥ 珍しい組み合わせが 見られた	特段大きな変化というものはないかと思いますが、以前はあまり話すところを見なかった生徒同士が話すようになったので、演劇ワークショップを通じてコミュニケーションを取るようになったのかもしれない。	生徒にとって話せる人が増えることは良いことだと思うので。
⑦ ピンポンゲーム での出来事	ピンポンゲームで、普段喋らないおとなしい子がゲームに参加した先生(自分)にふってきた瞬間と、そこで私が間違えて笑いが起こった時。	普段おとなしい子でも、先生にふってきた点は、ゲームなのでとっさにたまたま先生にふったということもあるが、積極的に狙っているということで、少し心を開いてくれているのかなとも感じ取れる。
⑧ 無題	楽しそうに参加し交流していたこともあり、WS後の交流も期待していたが変化はなかった。今後に期待している。	
⑨ 無題	特に関わり方で、変化はなかったように思います。	

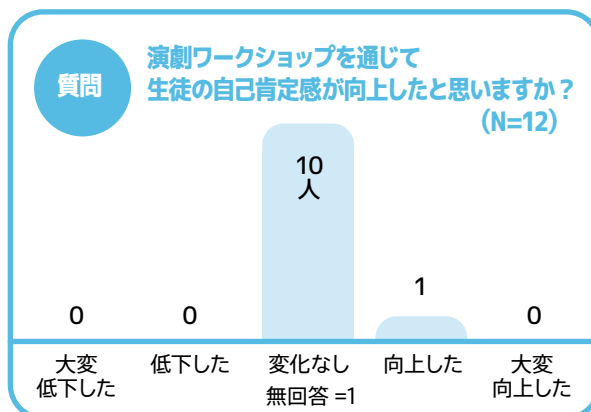
4 KPI 指標による評価

協力いただいた教員 12 名に、1 回目 WS 実施後の「生徒の自己肯定感の向上の度合い」について、1. 大変低下した (1 点) 2. 低下した (2 点) 3. 変化なし (3 点) 4. 向上した (4 点) 5. 大いに向上した (5 点) で、認識を尺度化しレーティングしてもらった (表 3)。平均は 3.09 で、「変化なし」が最も多かった。表 3 のグラフを参照いただきたい。無回答が 1 名あった。

KPI のレーティングについて、講師からは以下のようなコメントが寄せられた。

- 1 回の WS 実施だけで劇的変化は生み出せない。2 回目以降の影響に期待できる

表 3 KPI 調査結果：生徒の自己肯定感の向上について



- 実施時期が遅れたのも変化が少ない理由の一つである
- WS 2 回目を実施後、教員から「2 回目の WS を経て、生徒が普段では見られない才能を見せた」の発言を聞いた。
- 全体的に 2 回目以降では、先生と関係が密になった。

5 キー・インフォーマント・インタビュー

生徒が WS に 2 回参加した後の変化を調べるため、教員の代表として教員の小林氏へオンラインによるキー・イン

フォーマント・インタビューを 2022 年 1 月 31 日に行った。表 4 を参照いただきたい。

表 4 キー・インフォーマント・インタビュー要約

2 回目の WS 実施以降に見られた変化	<ul style="list-style-type: none"> ● 1 回目は緊張しているので生徒の自己開示が不十分なところがあったが、2 回目は自己開示が比較的スムーズであった。 ● 人と関わることに苦手意識を持っていた生徒ががんばって参加していた。 ● ゲームを通じて自分から関わりを作る姿勢が見られた。 ● 1 回目に全く参加できなかった生徒や目立たなかった生徒が、和気藹々と参加できた例があった。
WS の意義	<ul style="list-style-type: none"> ● 自己開示の仕方がわからない生徒にとっては、演劇 WS は貴重な機会である。 ● 自分の話だけに集中する生徒が、WS 中で講師から「人の話を聞くメリット」を諭されると、その後人の話を聞くように態度が変わった。 ● WS は生徒が自分たちだけで超えられないコミュニケーション能力のハードルを第三者の力で乗り越えられる。 ● また 2 回目の 1 週間前に来た転入生は、WS を通じて人間関係を作ることができた。 ● このような意義があるので、WS を 3 回フルで行うのが良いと思う。
どのような生徒に変化が現れるか	<ul style="list-style-type: none"> ● WS を楽しむことができる生徒にとっては貴重な機会である、自分を開放することができる。
WS が苦手な生徒	<ul style="list-style-type: none"> ● 2 回目では「自分の思いを表現するのはいやだ」と、WS が原因で休んだり、見学する生徒がいた。 ● 「幼稚なことはやりたくない」という生徒もいた。 ● 苦手意識を感じている生徒が欠席するので、WS は 2 回で十分と思う教員もいる。
日常のクラスと WS の関係	<ul style="list-style-type: none"> ● 人間関係が良好なクラス、日頃から自己開示をしているクラスは (教員指導で、オリエンテーションのアイスブレイクのゲームでクラスメートを交流させるような活動をやっているようなクラス) は WS にも良好に参加できていた。日常的なクラス作りと WS の両方が大切である。
WS 実施の時期について	<ul style="list-style-type: none"> ● 10 ~ 12 月になるとクラスの人間関係が既にできている。そこに入り込めなかった生徒や、トラブル起こした生徒は、WS 参加も難しかった。年度前半で生徒が学校に慣れる前だと、WS にもっと自然に参加させることができたと思う。 ● WS は年度の早い段階から行うべきである。今年はコロナのため食事「黙食」になるなど、生徒がコミュニケーションや自己開示を学ぶ機会が少なかった。

6 まとめと考察

1

WSによる生徒の意識・行動変容が一定程度観察された。

●生徒の自己表現・自己肯定感の向上に関して起った変化エピソード”「声」と#「他者に何かを発信すること」が最も重大な変化に選ばれたように、「声を出すこと、視線を送ることは人と関わる基本、(中略)皆の前で声を出す、相手の目をみて話すこと」といった変化が生徒の中でみられた。「これらは小さな変化」ではあるが、生徒の自己開示と自己肯定感を向上させていくための、最初のきっかけとして大きな意味があったと考える。

●生徒のクラス・先生・地域とのコミュニケーションに関して起った重大な変化

エピソード”「距離感」と「ピンポンバンゲームでの出来事」2篇が最も重大な変化に選ばれた。教員と生徒の間に存在した壁・ハードルが「ゲームを通じて取り払われた」「WSのゲームに先生が参加することが大事である」このように教員と生徒のより円滑なコミュニケーションと相互理解の実現に、WSが寄与したと考える。

2

WSを3回、年度前半から開始して実施することが効果的である。

●年度初頭から開始して3回の計画だったWSであるが、コロナ禍のため、ようやく第1回が10月に実施された。その段階で行ったMSC評価では、生徒の小さな変化が観察されたものの、大きな変化はみられなかった。またKPI調査では「変化なし」の回答が多数を占めた。一般に人間の意識や行動変容は、一回のみの介入で発現することではなく、一人一人が独自の道筋で時間をかけて実現する。講師の言うように、「積み重ねが大切」であり、また「変化に個人差がある」のが普通である。実際2回目実施後の小林教員の観察、「1回目は緊張しているので生徒の自己開示が不十分なところがあったが、2回目は自己開示が比較的スムーズであった」や、講師の「2回目以降では、先生と関係が密になった」との意見がある。また複数の教員が、「2回目以降の効果に期待」していた記述がある。今年度3回目は実施されなかったが、実施されればさらなる生徒の自己開示や自己肯定感の向上に寄与したと考える。実際に昨年度調査した、類似プログラムを3回実施した不破高等学校では、生徒に様々な変化が発現している³。計画通り3回WSが実施されることが望ましい。



●講師による「本来は年度の初期からWSを3回行なう計画であったが、スケジュールが遅れた。生徒の人間関係がゼロレベルで、お互いレッテルのない状態で行う前提で設計されたWSであったので、年度の後半になって、ある程度人間関係ができたからやっても効果が半減する」という意見、また小林氏による「10～12月になるとクラスの人間関係が既にできている。そこに入り込めなかった生徒や、トラブル起こした生徒は、WS参加も難しかった。年度前半で生徒が学校に慣れる前だと、WSにもっと自然に参加させることができたとと思う。可能ならWSは年度の前半から行うべきである」と発言があった。今年度はコロナ禍のため、遅れて10月の開始にとどまったが、計画通り年度初頭からWSを3回実施できた方がより高い成果が期待できると考える。

3

WSと日常のクラス作り両方の大切さが確認された。

単発的なWSのみで生徒の自己肯定感や自己開示を大きく向上させることは難しいと考える。「人間関係が良好なクラス、日頃から自己開示をしているクラスはWSにも良好に参加できていた」と小林氏のインタビュー結果があった。教員による生徒の人間関係構築など日常的なクラス形成と、演劇WSの両方が適切に実施されたときに、学校が生徒にとって心地よい「居場所」となり、生徒の自己肯定感の向上やコミュニケーション力の育成に相乗効果があると考えられる。このような地道な努力がなされていけば、「WSが苦手な生徒」の問題なども徐々に解消していくのではないだろうか。



医療的ケアを要する 在宅療養児と その家族とともに 避難所での共助を育む 演劇ワークショップの可能性

名桜大学人間健康学部看護学科所属 松下聖子

Profile

松下聖子

名桜大学人間健康学部看護学科所属。

担当領域は小児看護学・災害看護学。阪神・淡路大震災を体験し、災害看護に関心を持つようになった。2021年2月に演劇ワークショップを知り、学生たちの生き生きとした姿に感動し、演劇ワークショップを授業に取り入れている。「医療的ケアを要する在宅療養児とその家族とともに避難所での共助を育む演劇ワークショップ」をテーマに学生、医療福祉関係者を対象にワークショップを開催した。現在、学生、医療福祉関係者のほかに当事者家族・地域の人々とともにワークショップを開催し、演劇を取り入れた災害時の防災・減災教育プログラムの構築を目指している。

1 はじめに

新生児医療の発達により、健康障害を抱えた子どもの救命率は向上した一方で、常時、酸素吸入や人工呼吸器、経管栄養を必要とする医療的ケアを要する子ども（以下医ケア児とする）たちが在宅で生活ができるようになった。医ケア児は、災害時の避難行動や避難所生活では要配慮者として位置づけられるため、様々な場面で多くの人々のサポートが必要となる。地域に暮らす、医ケア児とその家族が災害発生時の避難所において、求められる支援とその対応について、名城大学看護学科2年次とともに演劇ワークショップを実施した。

この演劇ワークショップは、「医療的ケアを要する在宅療養児とその家族への災害時の看護」について演劇を用

いた演習講義として小児看護学概論の講義の中に位置づけられている。災害看護についての学修は今回はじめてである。したがって、学生自身の台風等の災害体験を想起しながらの学修である。

演劇ワークショップでは、与えられた台本に沿って行うのではなく、事例から考えられる問題点をグループ間でディスカッションをし、演劇をするためのシナリオ作成から始め、演劇の発表、評価を受ける。このプロセスの中で、学生が何を感じ、考え、どう変化したのかをワークショップ後のアンケートより分析し、演劇ワークショップの可能性について考察する。

2 演劇ワークショップの進め方

小児看護学概論の医療的ケアを要する在宅療養児とその家族への災害時の看護として演劇ワークショップを用いて講義を展開した。テーマは、「医療的ケアを要する在宅療養児とその家族とともに避難所での共助を育む演劇ワークショップ」であった。81名の学生を40名と41名の前半グループ・後半グループに分け、同じ内容で2回行った。前半グループ・後半グループをさらに5つのグループに分けた、1グループは、学生5～6名とファシリテータとして

TEAM SPOT JUMBLE の方1名で構成された。ワークショップのテーマに合わせて、5つの事例を提示した（表1. 参照）。ワークショップは、アイスブレイキングのあと、事例に沿って、どのような問題が発生するのかを検討し、進め方や配役等について話し合った。その後各グループが作成した演劇を発表し、感想や課題解決策についてディスカッションをした（表2. 参照）。

**表1 医療的ケアを要する在宅療養児とその家族とともに避難所での共助を育む
演劇ワークショップ事例**

事例番号	内 容
事例1	まあちゃん、女兒、2歳は、生まれつきの病気のため、気管切開を行い人工呼吸器をつけています。そのため、1時間おきの吸引が必要です。また、経口摂取もできないため、胃瘻から栄養剤を1日4回、カンガルーポンプを使って1回1時間かけて注入しています。まあちゃんは、人見知りが激しく、知らない人の中にいると大泣きをします。今回、災害が発生し、母親と二人で避難してきました。避難所は、30名入るといっぴいになる小規模の避難所です。1時間おきの吸引で、大きな音が出たり、吸引の時大泣きをしたり、人工呼吸器が作動しているため夜間はモーターの音が避難所内に響きわたり、周囲の避難者からクレームがきています。
事例2	とし君、男児、7歳は、交通事故の後の障害のため、気管切開を行っています。そのため、1日に4回程度の吸引が必要です。体を動かすことができないので、大型で、リクライニングできる車いすを使っています。脳障害があるため、時々奇声を発することもあります。お母さんと避難してきましたが、避難所には多くの人が避難し、トイレから一番離れた場所が、とし君の場所になりました。お母さんは、トイレに行きたいのですが、離れると奇声を上げるので、なかなかトイレに行けず困っています。
事例3	公(きみ)ちゃん、女兒、10歳は、先天的な障害のため軽度の知的障害と心疾患があります。知的障害があるので、3歳くらいの理解力ですが、誰にでも愛想が良く、人懐っこいところがあります。また、心疾患があるので、常に酸素飽和度をチェックする必要があり、酸素飽和度が93%を切ると酸素吸入が必要になります。酸素ポンプをもって母親と2人で避難してきました。避難場はすでにいっぱい人がいます。もうこれ以上入ることは出来そうにありません。しかし、酸素ポンプを持っているため、他の避難所を探していくのも大変です。何とかこの避難所に入りたいのですが、入れる様子はなく困っています。
事例4	孝君、男児、5歳は肝臓病のため多くの機械を付けています。人工呼吸器、酸素、酸素飽和度計、心拍モニター、持続吸引、カンガルーポンプによる胃瘻注入で、多くの電源を必要とします。多くの機器があるため、やっとのことで避難してきました。避難所には、子ども達もたくさんいました。子どもたちは、ゲームやネットで遊んでいます。避難所には、避難者が使用できる電源に限りがあります。孝君には多くの電源が必要です。そのために避難をしてきました。ところが、子ども達が電源を使っていて、孝君が使える電源がありません。お母さんが、電源を貸してほしいと訴えています。なかなか聞き入れてもらえません。早くしないとバッテリーが切れてしまいます。
事例5	たっくん、男児、11か月は、脳性麻痺です。やっと思も座り、寝返りを始めたころです。吸入と吸引を時々行っています。避難所では、床に寝かすことができないので、机をベッド代わりに寝かしていました。母親は、まだ若く、初めての子で育児になれていません。避難所は、知らない人ばかりで母親は戸惑い、今にも泣きだしそうです。いつも、心配そうにたっくんを見ていましたが、疲れが出て、ついうとうとしてしまいました。その時、ドスン!という音とともに、大きな声でたっくんは泣きだしました。お母さんは、びっくりしてたっくんを抱き上げました。幸い、下にクッションになるものがあったので、大事には至りませんでした。母親はショックを隠し切れずうろたえ、自分を責めています。

表2 演劇ワークショップの進め方

展開	時間	内容
導入	20分	<ul style="list-style-type: none"> ●グループ編成 ●アイスブレイキング
展開	50分	<ul style="list-style-type: none"> ●事例の理解 ●問題点を抽出、場面設定 ●進め方、配役の決定 ●発表練習
まとめ	20分	<ul style="list-style-type: none"> ●グループごと発表 ●発表後ディスカッション どのような解決策があるのか

3 調査方法

1. 対象者: 名桜大学看護学科 2 年次 81 名
2. ワークショップ開催日: 2021 年 11 月 1 日、11 月 22 日
3. 調査方法: googleform による
無記名自記式質問紙調査

4. 調査内容

- ! 楽しくワークショップに参加できたか
- " 普段と違う創造的な表現ができたか
- # 建設的な話し合いができたか
- \$ 体験前の演劇に対する印象の内容
- % 体験後の演劇の印象の変化の有無
- & 自由記載による体験後の演劇の印象が変化した場合

5. 分析方法: 調査内容の!~%については単純集計した&については、記述内容を精読し、文章の類似性で集め、カテゴリー化した。

4 倫理的配慮

アンケートの使用目的・使用方法・匿名性・結果の公表について説明し、同意を得た。

5 結果

1 対象者の概要

参加学生は、名桜大学看護学科 2 年次の 81 名であった。アンケートへの回答は 76 名で回収率 93.8%であった。

2 アンケートの結果

①アンケート内容について

楽しくワークショップに参加できた 95%、ややできた 5%で、学生は楽しみながら参加していた(図 1. 参照)。

普段と違う創造的な表現ができた 91%、ややできた 9%で、学生は、普段とは異なる創造的な表現方法を用いていた(図 2. 参照)。建設的な話し合いができた 95%、ややできた 5%で、学生の話し合いは建設的であった(図 3. 参照)。演劇ワークショップを体験する前の印象は、恥ずかしい 26%、難しそう 25%、初めてなので馴染めるか不安 19%、何をさせられる 12%、つまらない 1%であった。一方、面白そう 17%で、体験前は、楽しみにしている学生より不安感が強い学生の方が多かった(図 4. 参照)。演劇に対する印象が変わった 43%、変わらない 57%であった(図 5. 参照)。

図1 楽しくワークショップに参加できましたか?

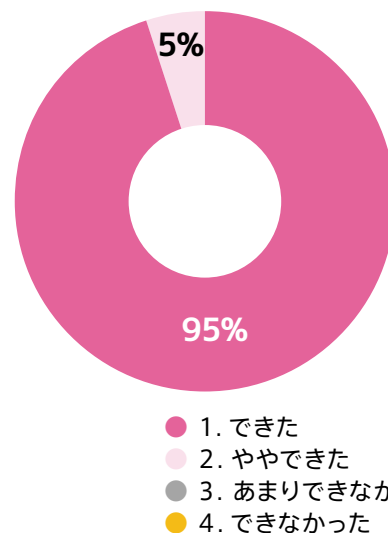


図2 普段と違う創造的な表現ができましたか?

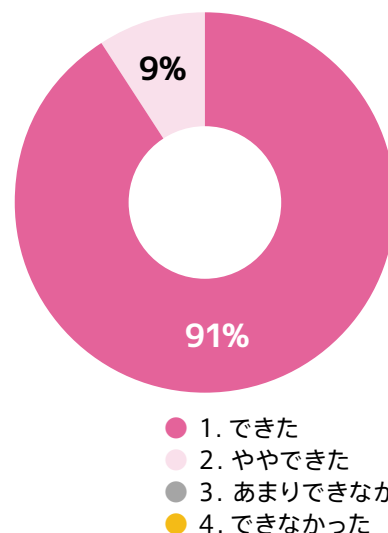
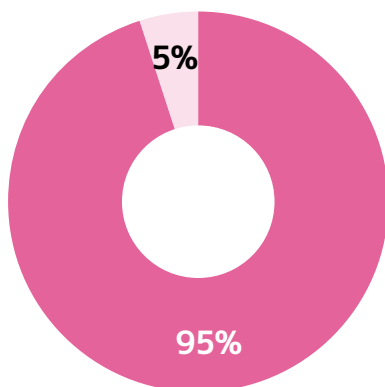
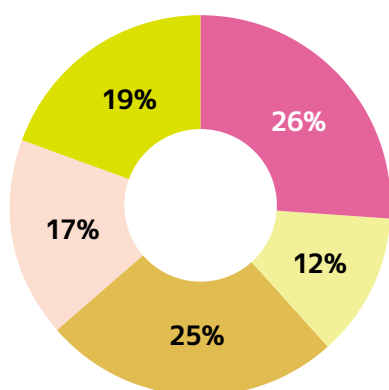


図3 建設的な話し合いが
できましたか？



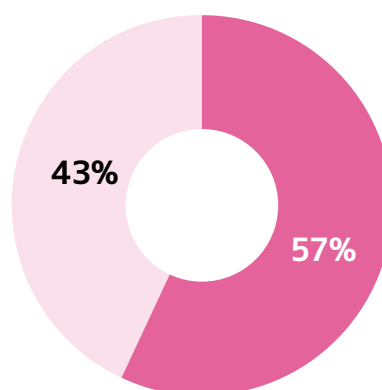
- 1. できた
- 2. ややできた
- 3. あまりできなかった
- 4. できなかった

図4 体験する前、演劇の印象は
どうでしたか？(複数回答)



- 1. 恥ずかしい
- 2. つまらない
- 3. 何をさせられる
- 4. 難しそう
- 5. 面白そう
- 6. 初めてなので馴染めるか不安だった

図5 体験して演劇に対する
印象は変わりましたか？



- 1. 変わらない
- 2. 変わった

②演劇の印象が変わったと回答した学生の 変化の内容について

体験して演劇に対する印象が変わったと回答した学生は35名であった。自由記載による演劇体験後の変化については、88の記述内容から【立場の変換】【楽しい体験】【求められる思考力・想像力】【問題の本質への洞察】【演技の難しさ】【深く考えるきっかけ】【主体的

な参加】【未来への心構え】【認められる喜び】【作り上げる楽しさ】【自己成長の実感】【身近な存在としての演劇】【学習方法としての演劇】の13のカテゴリーが抽出された。以下に項目について説明する(表3. 参照)。結果の文中の【すみ付きかっこ】はカテゴリーを表わし、【角かっこ】は記述内容を表わす。

表3 演劇体験後の印象の変化

カテゴリー	記述内容
<p>立場の変換</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●書かれているものをそのままやるイメージがあったが、自分たちの考えで役を決めたりセリフを考えたりして、いろんな立場について考えることができた。 ●自分がその役割になり切ること、それまで分からなかった立場の考え方をすることができるようになった。 ●演技をすることで気持ちがこもり誰かの気持ちを深く考えるきっかけにしてくれた。 ●初めは恥ずかしさや難しさがあったけど、実際に演じることによって、その立場の人の気持ちを考えるキッカケになると学んだ。 ●役になることでその人の気持ちを考えることができた。 ●演劇をする意味がわからなかったが、演劇をすることで記憶に残り、状況を考えたりその人の気持ちを考えたらするきっかけになった ●初めは、恥ずかしいとか自分には無理かもというような思いが強かったが、実際に演劇をやってみて、当事者の気持ちになって考えることもできた。 ●演じることでその人の気持ちを理解することにも繋がったと思います。 ●避難所では協調し生活しなければならないのに、そこでクレームを言う人たちについて私は、理解がなかった。演技を通して、彼らにも精神的に辛い部分があるのだと理解する事ができた。 ●疑似体験を通していろんな立場の人の考えを理解できる。 ●演劇をすることで、その立場の人のことを考えることができるのだとわかった。 ●元々、たのしそう！ってイメージだったけど、演技を通すことで役の中のリアルな心情とかを考えることができ、患者に寄り添う看護と結構密接なのかなと感じました。 ●やってみることで実際にその立場に立って考えることができ、演じてみることは大切だと感じるようになった。 ●普段はレポートなどでその人の立場になって考えるということしかしたことがなかったが、今回はその人の立場になって感じる事ができたと思った ●演劇をすることで、避難所で過ごす人々が感じることや問題に上ることを当事者の立場に立って知ることができたと感じるため、より深く理解するためには良い機会であったと感じる。 ●災害時に助け合いが大事と分かってはいても、実際には自分優先に考えてしまう人が多くなり、譲らない人もいるのだなと思った。優先度を考えることは難しくても、自分に置き換えると少しは考えられるかなと思った。また、周りの支援は大事だと思いつい勇気を持って一声かけることでも救われる人はいるのだなと感じることができた。 ●初めは、嫌な感じを出す役に対して上手くできるか不安とそのような役をするのに抵抗があったが、なぜこのような気持ちになるのかを実際に役として体験することで見えてくるものがあり演劇ってすごい楽しいなと感じることができた。 ●演劇をしたことによって、文字を通してだけでは分からない感情や、事例から読み取れる課題などを把握して、自分のこととして問題視することができた。 ●イレギュラーな場面では冷静に居られないことも実感できた。
<p>楽しい体験</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●どのような演劇をするのか不安があったが、みんなでセリフや演出を考え、全員で演劇を作った感覚があり楽しい体験になった。 ●自分の割り振られた役目に対して、たくさんアドリブなどを加えて演劇を楽しむことができた！ ●みんなで話し合いながら、演技を作るのが楽しいと思った。 ●最初は恥ずかしかったけど、やってみると思いっきり演じることが楽しいと思った ●演劇をやる前よりは、面白いと思うようになった。恥ずかしがらないで堂々とやった方が、やってる側も見る側も面白くなると感じた。 ●前やっていた習い事を思い出して楽しくできた。 ●劇と聞いてできるか不安が強かったのですが、劇団の方が盛り上げてくださったのでとても楽しく活動することができました。 ●すぐみんなの雰囲気がよく、馴染みやすかった。また、盛り上げ上手でとても楽しくすることができた。 ●恥ずかしさもあったが、実際やってみると楽しくできた。 ●難しいと思っていたが、楽しくできた！ ●恥ずかし気持ちは今も変わらないが、やっていて面白いし、わかりやすく学べる ●やってみるとみんなが思ったよりリアクションしてくれて、やりやすかったです。暖かくみてくれていたのが伝わりました！たのしかったです！ ●最初は演劇に対して、自分自身が行うことは嫌だなと考えていた。けれど、実際に自分で行ってみると、意外と楽しくできて良い印象へと変わった。 ●楽しくて自由なものなので不安に思う必要はないと思った。 ●演劇が楽しいものだわかった。 ●最初は恥ずかしいとおもっていたけど、ちゃんとやれば周りも盛り上がって楽しかったのでもっとやるということが演技の楽しさなのかなと思いました。 ●最初は演劇をすることに恥ずかしさがあり不安だったが、実際に演劇を行い、グループの人とコミュニケーションをとることができたので、楽しかった。 ●後半組だったから緊張したけど、みんなが思い切りやっているのが伝わったから、自分も楽しく演技することができた。 ●最初は演劇できるのかという不安が大きかったが、体験をして演劇の面白さを知った。演劇を通してチームの雰囲気も良くなった ●演劇は楽しいというイメージが変わった。

カテゴリー

記述内容

<p>楽しい体験</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●もともと面白そうと考えていたがさらに面白と感じた。 ●意外と演劇をするのは、楽しくて、どうすれば盛り上がり、状況をうまく見ている人の伝わるのか考えていくことが楽しかった ●最初は恥ずかしいとか難しそうとか言うイメージがありましたが、グループで色々話し合ううちにみんなで同じ方向に1つの作品を作ろうという一体感が生まれて、恥ずかしさも無くなりました。初めての体験でしたが楽しかったです。ありがとうございました。 ●演技をすることは恥ずかしかったが、終わってみると楽しかった。 ●色々な事例と役柄があり、とても面白く学修することが出来たのではないかと感じる。
<p>思考力・想像力の必要性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●ただ事例を文字で聞いて考えるよりも役があるからこそセリフを考えなければいけないので色々な可能性を考える必要があった。 ●自分たちで場面の想像を膨らませていくことでこんなケースもあると考えることが出来た。 ●演劇を自分たちで考えて行うことで、色んな想像を膨らますことができた！ ●実際に演劇をして自分たちで表現をすることで、教科書等を読むだけでは分からないことを考えることが出来た。 ●この状況に対してどのような可能性があるのかも考えることができた。 ●自分がそのお題について劇をすることでその現状を考えることが出来て当事者の気持ちになって深めることができた。
<p>問題の本質追及</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●恥ずかしいという周囲からの視線に対する気持ちに注目するのではなく、演劇を通してその役やテーマに対する気持ちがどう変化したかに注目するのが大切だと感じました。 ●最初は、恥ずかしいと思っていたけど、他のグループの発表を見たり、自分が発表したりしていくうちに、恥ずかしさよりも演劇中の問題点について考えることを中心にしていって、演劇だとわかりやすいイメージも膨らんだので良かったと思った。
<p>演技の難しさ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●一つ一つの役にそれぞれの考えや事情があって、それをセリフや演技で表現するのが思っていたよりも難しかった。 ●実際に言葉では無く演劇で人に伝えることは難しく感じた。 ●演劇は今まで小学校の時に決められたセリフを決められた役でやるだけだったけど、今回はどうゆうストーリーにするか、どこを伝えたいかをみんなで話し合いながらやるのが難しかった。
<p>深く考えるきっかけ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●その事について深く考えるきっかけにもなると感じた。 ●演劇のセリフや場面を考えるとときにその役の人の立場や気持ちを想像することでその場面の雰囲気や役の人にどういった声かけをすべきか深く考えるきっかけになった。 ●文章だけではイメージできなかったことを演劇を通して細かい部分まで知ることができた。 ●演劇を行うに際して、文章で読んで事例を考えるよりも、より詳細に場面を想定して考えるため問題の箇所が濃く浮き彫りになったと考える。また、文で読んだ時にはどうしても困っている主人公がどこで困難を抱えているのかを考えるが、他の役をやるとなると、主人公と関わることでその他の役の人がどのような気持ちになるかなど他の人にも目が向くようになったと考える。このような考えがあったことから、どうして演劇をするのだろうかとすこしまイナスの気持ちでスタートした劇であったが利点をたくさん見つけ、たのしく事例を解釈し、印象が変わったと考える。 ●伝えようとすることで自分自身も考えることができ、演劇を観る側でも何が重要なのか、側の様子から読み取ることも一度にたくさんの情報から問題点、解決策を考えることができた。 ●演劇をするにあたって、今までは台本がある劇を演じることしかなかったが、今回は状況を考え自分たちで作り上げる必要があったため、作成を通して演劇で考えを深められるのだと知った。 ●台詞を読んだり表情を作ったりするだけだと考えていたが、登場人物の気持ちやそのシチュエーションの全体図を細かく理解していないと演技はできないのだなという考えに改まった ●それぞれでセリフを考えたり、状況を組み立てたりして楽しく、学びを深めながらできたのでよかったです。 ●今までの知識だけでは気づけない問題点が見つかったり、支援が必要な人がどのような行動を求めているのか考える機会になった。 ●演劇の人たちはそのセリフをただいうのではなく、その人の背景や状況を想像することができて、想像を膨らませることができると感じた。
<p>主体的な参加</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●最初は恥ずかしかったり、ちゃんとできるか不安だったりしたが、自分から内容を決めたり仕切ったりすることができ主体的に行動できたため、楽しかったと感じた。 ●自分が楽しく劇をすることで見ている人も楽しくなるため、劇をする側が楽しむことが大切だと感じた。 ●今までの劇は演じさせられるという感じがあったが、今回は自分たちが考えたことを自由に表現するという自分たちで作り上げる感じだったので楽しかった。 ●演劇を教えてくださいと人が話しやすい雰囲気をつくってくれたので、積極的に参加することができた。 ●はじめは、交流を持ったことがない人と同じグループだったので、グループに馴染めるのか不安だったけれど、1番最初のゲームを通して自分を出せるようになって、演劇の構成についても意見を言ったり積極的に参加することができてよかった。

表3 演劇体験後の印象の変化

カテゴリー	記述内容
未来への心構え	<ul style="list-style-type: none"> ● 実例をやることでこれから行動を変えていこうと言う前向きな気持ちも持つことができた。 ● テレビでしか見たことない避難所という場所を、今回のワークショップで実際に訪れた気持ちになりました。実際には、今回問題提起されたものよりも多くの問題が発生するだろうし、全て完璧に解決することはとても難しいだろうなと思いました。医療的ケア児が避難所で生活する際には様々な困難がありますが、その場合でも医療従事者としてできる行動で対象者に寄り添いたいと思います。
認められる喜び	<ul style="list-style-type: none"> ● 恥ずかしいものだと思っていたけど、やってみて周りがそれを認めてくれると嬉しかった。 ● 自分たちで演じた場面についてみんなが評価や感想をくれて、伝えなかった場面や草稿、問題点などが伝わっていたので良かった。
作り上げる楽しさ	<ul style="list-style-type: none"> ● みんな小道具とか何も使っていないけど、体ひとつであそこまでいろいろな表現ができることを知り楽しかった。 ● 演技が上手く出来るか不安だったし、あまり目立つような役はしたくないと思ったけど、やってみて上手い上手くない関わらずみんなアイデアを出して劇をすることで楽しむことができました。 ● みんなで意見を出し合いながら協力して行うことができとても楽しかったです ● 自分が、思ったことを思ったようにしていいんだと思った。ちゃんと台本があって、型にはめてやるのではなく、今回のように意見を出し合って、作っていくのって面白いなと思った。 ● これまでは見る側としてしか演技に関わることはなかったので実際に体験してみて、台本が無くてもみんなで作ることを共有して作る中でいろんな意見を聞くことができ、どんどん形になっていく様子がとても楽しかった。
自己成長の実感	<ul style="list-style-type: none"> ● みんなで劇を作る際に協力して話し合いすることでお互いを受けいれたり自分を主張したりすることが出来るようになった。 ● 演劇には正解がなく、自分が思うようにやってみることが大切ということを学ぶことが出来た。 ● 最初は、ただただ難しそうで恥ずかしい気持ちもあったが、実際にはきちんとした事例が提示され、その役に入り込んでアウトプットしなければならないと考えると、恥ずかしさよりも役者魂のようなものに切り替わった気がした。 ● ほかの人たちの演技を見ることでこの人にはどのように対応したら良いかななどを考えながら見る事が出来た。
身近な存在としての演劇	<ul style="list-style-type: none"> ● 難しい印象しかなかったけど短時間でもみんなで作った内容や演技はちゃんと伝わるしやってみることで演技をもっと身近に感じる事ができた。 ● 馴染めるか不安といった印象が大きく変わり、演技を通してみんなとの距離を近づけて考察したりできるんだと感じた。
学習方法としての演劇	<ul style="list-style-type: none"> ● 看護師になる上で演劇は必要のないものだと思っていましたが、今日のように医療に関する事例を座学ではなく演劇で披露することで、置かれている場面の理解が深まったり、登場人物の考えや問題が見えてきたりするため、演劇も一つの学習手段になるんだと思った。 ● 文字から想像することよりも、実際に演技したことによって立体化され、それが学習につながったことが印象的だった。

学生たちは、演劇ワークショップで、与えられた事例が【深く考えるきっかけ】となり、「この状況に対してどのような可能性があるのかも考えることができた。」など【思考力・想像力の必要性】を実感し、「恥ずかしいという周囲からの視線に対する気持ちに注目するのではなく、演劇を通してその役やテーマに対する気持ちがどう変化したかに注目するのが大切だと感じました。」と【問題の本質追及】を行っていた。そして、思考力や想像力を働かせ、問題の本質追及を行うことで、自然と相手の立場や気持ちを感じており、「演劇をすることで、その立場の人のことを考えることができるのだとわかった。」【演劇をすることで、避難所で過ごす人々が感じることや問題に上がることを当事者の立場に立って知ることができたと感じるため、より深く理解するためには良い機会であったと感じる】といったように、演劇を通して自分の立場からものごとを考えるのではなく、相手の立場に立って物事を考えることの大切さを実感し、そのための【立場の変換】を行っていた。これらは、TEAM SPOT JUMBLEの方々のサポートを受けながら、暖かい雰囲気の中で、「演劇を教えてください人が話しやすい雰囲気をつくってくれたので、積極的に参加することができた。」【はじめは、交流を持ったことがない人と同じグループだったので、グループに馴染めるのか不安だったけれど、1番最初のゲームを通して自分を出せるようになって、演劇の構成についても意見を言ったり積極的に参加することができてよかった。】と【主体的な参加】につながっていた。そして、「一つ一つの役にそれぞれの考えや事情があって、それをセリフや演技で表現するのが思っていたよりも難しかった。」と【演技の難しさ】を感じながらも【みんなで意見を出し合いながら協力して行うことができてとても楽しかったです】【自分が、思ったことを思ったようにしていいんだと思った。ちゃんと台本があって、型にはめてやるのではなく、今回のように意見を出し合って、作っていくのって面白いなと思った。】とグループ間での話し合いを通して0から【作り上げる楽しさ】と同時に【自分たちで演じた場面についてみんなが評価や感想をくれて、伝えたかった場面や仕草、問題点などが伝わっていたので良かった。】と【認

められる喜び】を味わっていた。さらに、「みんなで劇を作る際に協力して話し合いすることでお互いを受けいれたり自分を主張したりすることが出来るようになった。」と新たな自己を発見し【自己成長の実感】と、「テレビでしか見たことない避難所という場所を、今回のワークショップで実際に訪れた気持ちになりました。実際には、今回問題提起されたものよりも多くの問題が発生するだろうし、全て完璧に解決することはとても難しいだろうなと思いました。医療的ケア児が避難所で生活する際には様々な困難がありますが、その場合でも医療従事者としてできる行動で対象者に寄り添いたいと思います。」と看護師としての自己を再確認し【未来への心構え】ができ、「最初は恥ずかしかったけど、やってみると思いっきり演じることが楽しいと思った。」【楽しくて自由なものなので不安に思う必要はないと思った。】と不安はあったものの最終的には【楽しい体験】となった。そして、「難しい印象しかなかったけど短時間でもみんなで考えた内容や演技はちゃんと伝わるしやってみることで演技をもっと身近に感じることもできた。」【馴染めるか不安といった印象が大きく変わり、演技を通してみんなとの距離を近づけて考察したりできるんだと感じた。】と【身近な存在としての演劇】を体感し、「看護師になる上で演劇は必要のないものだと思っていましたが、今日のように医療に関する事例を座学ではなく演劇で披露することで、置かれている場面の理解が深まったり、登場人物の考えや問題が見えてきたりするため、演劇も一つの学習手段になるんだと思った。」【文字から想像することよりも、実際に演技したことによって立体化され、それが学習につながったことが印象的だった。】と【学習方法としての演劇】を発見した。



6 考察

今回、演劇ワークショップを実施し、その後のアンケート調査で学生たちは、当初不安感を抱きながらも、最終的には楽しく実施することができていた。質問2および質問3で、「できた・ややできた」をできた群、「できなかった・あまりできなかった」を出来なかった群と分けたとき、「普段と違う創造的な表現ができた」「建設的な話し合いができた」というそれぞれの質問に全員ができた群に入っている。このことが「楽しく参加できた」につながったのだと考える。つまり、演劇という場あるいは自分ではない誰かになり、その誰かはどう思うのだろうか、どう考えるのだろうかと思いをめぐらすことで、新たな自分との出会いがあったのではないかと考える。

また、演劇体験後の印象の変化の中に、【思考力・想像力の必要性】・【問題の本質追及】といった内容があった。これらは、事例に対し、いろいろと考えをめぐらせていたことが伺える。そして、【立場の変換】では、事例に関す

る理解が深まり、自分以外の誰かになり切り、その人の思いや考え、行動の意味をくみ取ったのではないかと思う。この【立場の変換】は、他者とのコミュニケーションにおいて重要なことである。さらに、【作り上げる楽しさ】では、協力し合うことや話し合うことの楽しさが表現されており、【自己成長の実感】として他者を受け入れながらも自分を主張するという、他者との折り合いをつけている様子が伺える。さらに、【主体的な参加】では、シナリオを意見交換しながら自分たちで決めており、自ら考え行動することに繋がっている。したがって、演劇ワークショップでは、シナリオ作成から演劇発表までのプロセスを通して、災害をリアルに疑似体験し、そのことが対象理解につながった。さらに演劇ワークショップは経済産業省が提唱した社会人基礎力である「前に踏み出す力」「チームで働く力」「考え抜く力」を養う一助になるものと考えられる。



社会の処方箋と なるために

—医療現場の期待に応え、
共同で新たな可能性を探る—

特定非営利活動法人 日本演劇情動療法協会 理事長 前田有作

Profile

前田有作

1968年5月10日生まれ。仙台市出身。東北福祉大学社会福祉学部社会福祉学科卒業。文学座付属演劇研究所第32期。特定非営利活動法人日本演劇情動療法協会理事長。演劇情動療法士。有限会社ラック代表取締役。劇団LGT主宰。俳優・演出家。日本演出者協会会員。平成20年度宮城県芸術選奨演劇部門新人賞受賞。銭湯「花の湯」店主。

はじめに

演劇の手法を用いた演劇情動療法は、認知症専門の医師・介護スタッフがそろった宮城県仙台市にある仙台富沢病院とのエラボレーション（綿密な共同）によって成り立っている。エラボレーションを行うにはそれぞれの領分を活かしつつ互いを理解し補い合うことが必須となる。私は演劇ばかりをやってきたので医療の知識はほとんどなかった。認知症に関する知識もネットや文献で得ることはできるが、現場での知識や経験はさらに具体的で深いものがあり、興味をもって知識を得る事が出来た。ここでは俳優・演出者として、認知症をどうとらえたのか、そこに自分がエ

ラボレーションするために何を行ってきたのかを下記の順で書き置く。

- 認知症医療に関する知識
- 演劇に何を求めているのか
- 演劇はどうすれば役に立てるのか
- 演劇はなぜ求められたのか
- エラボレーションは欠かせない
- 演劇情動療法の成果
- 演劇情動療法の可能性

認知症医療に関する知識。現場の様子と問題点を知る

まず、認知症とは脳の病気や障害など様々な原因により認知機能が低下し、日常生活全般に支障が出てくる状態のことである。これは MMSE（認知機能検査 / Mini Mental State Examination）などのテストで診断される。脳の外側、大脳新皮質の劣化、あるいは老化の具合を見るのである。問題点として挙げられるのは、認知症の診断がいわゆる IQ（認知機能）テストのみであり、そこには本人が生きた80年間の人生経験や思いやり、優しさ、人間性を発揮する EQ（情動機能）を診断基準に含んでいないことだ。

人は知識のみにあらず、心によって存在しうるのに…

認知症の捉え方として、老化は病気なのかという点を考えてみたい。

1947年の平均寿命は男 50 歳、女 54 歳、

2008年には男 79 歳、女 86 歳

※厚生労働省データより

人生50年といわれていた時代は、脳の老化よりも早く身体や臓器が老化し病気で亡くなっていた。今や人生80年。食事や医療の進歩により、身体や臓器は健康維持できる。よって脳の老化のほうが先に起こってしまっている。老化は病気ではない。老化に病名を付けることを

必要とする人たちがいるだけだ。

本来、年を重ねたらそれに応じた運動量、食事量、人生の過ごし方（並行老化）をすればよい。しかし現代は、年をとっても若者に負けられないような過ごし方（成功老化）を社会から求められている。その影響もあり「認知症になったら落伍者」のイメージはどんどん蔓延していると感じられる。

老化といえば連想するのが、縁側に座っているおばあちゃん。近所の人と茶飲み話をしてニコニコ過ごしているおばあちゃんは、日本的な景色として微笑ましい。

ところが現在は、彼女を捕まえ記憶力・計算力のテストをして、得点が低いので認知症と病名をつける。家族は認知症であることを知られないようにおばあちゃんを縁側に出さず、施設に移す。今や日本から縁側のおばあちゃんは消え、人と人をつなぐ縁側も消えた。

これは人の死生観、年長者を敬うといった道徳を含む社会的な問題である。同時に医療の在り方、人を治す・癒すことへの姿勢が問われていると考える。

演劇に何を求めているのか

「医学の手の届かない部分は、芸術に助けてもらわなくてはなりません」

東北大学医学部老年科名誉教授の佐々木英忠先生（仙台富沢病院院長）同じく東北大学医学部老年科臨床教授の藤井昌彦先生（仙台富沢病院理事長）は、演劇情動療法の共同研究のなかで有意なエビデンスを得、そう語った。

2013年12月、仙台富沢病院の関係者から、「認知症患者を感動させてほしい」という突然の依頼があった。認知症って何？認知症の方は感動できるのか？そもそも朗読が理解できるのだろうか？インターネットで調べてみると、“小学生並みの認知力、徘徊、妄想、突然の大声、家族が手を焼く・・・”

不安だけしか頭がない状況で、「昔の記憶に訴える、どこにでもある日常」を描いた作品をと考え、岸田國士「驟雨」を選んだ。“新婚旅行中に旦那に失望し、姉夫婦の住む家に突然押し掛け、泣きながら旦那の悪口を散々言って姉夫婦を困らせる”と言う内容に笑いが出るかもしれないと期待したのだ。

「うるさい！帰れ！」仙台富沢病院のデイサービスで、初めて認知症の方へ朗読を行ったときに受けた洗礼である。不安は的中した。言われたとおり、帰りたいかった・・・目の前の観客に怒鳴られる俳優はそう居ないだろう。

この状況を私の横で喜んでいたのは、「認知症患者を感動させてほしい」と私に依頼した張本人、佐々木英忠院長。彼は顔を真っ赤にして怒鳴る男性の反応を見て、「あ

の人にこれほどの情動が残っていたのか！」と満足顔であった。認知症では鬱に似てほとんど反応しないという状態が多い。落ち込む私の肘を掴むと、別のエリアに連れて行きそこで再チャレンジ・・・。

この日、私は三度怒鳴られた。

佐々木院長は私に何を求めたのだろうか？

下らぬプライドが崩壊した頭で考えた。なぜ失敗した？何が良くなかった・・・作品の選択か、朗読のスタイルか、やはり子供にも理解できる作品を選べば良かったのか・・・？

翌週から、佐々木院長が選んだ認知症の方約10名と、ごんまりとした部屋で週に一度、朗読を続けることになった。

「手袋を買いに」、「ごんぎつね」、「泣いた赤鬼」・・・私の真剣さにかかわらず、反応が良くない。トイレ立つと戻ってこない・・・。しばらく続いたこの状況を変えたのが「マッチ売りの少女」だった。“少女が凍えて残りのマッチで温まろうとすると大好きなお婆さんが現れる”ここで鼻をすする音、涙をぬぐう仕草。「お婆さんは迎えに来てくれましたね」と私が呟くと「んだね」「お孫さんかわいいですね」「んだっちゃん、めんこいよお」参加者の誰からともなく孫自慢が始まった。そのお喋りの中で参加者の表情が明るくなって行く。孫の名前、孫の数、孫・ひ孫自慢。涙の後に楽しい語らいの場が生まれた。情動機能の再生である。



演劇はどうすれば役に立てるのか

(分析・評価・情報収集・試行・観察・分析・・・)

このセッションを観ていた佐々木院長、藤井理事長、介護スタッフの方々と話し合う。なぜあの反応が起こったのか。作品にリアルな人間の感情があったからではないか。子供向けの動物や鬼などが出てくる話よりも、人間同士の心の機微がリアルに描かれている作品が良いのではないか。こういった分析を毎回積み重ね、作品を選ぶ。「英霊の言の葉」「納豆合戦」「笑う門」「父帰る」「女の一生」…

少しずつ時間の長いものを朗読。トイレに去っていく人も居らず、眠りこける人も居なくなった。

三か月後には朗読会に参加している認知症の方に明らかに変化が見られるようになる。顔色が良くなって穏やかに。お化粧をして服装も明るく、部屋の空気も明るくなった。半年ほど経ち、落語で笑いが出るようになる。初期に試したことがあったが、記憶時間が短すぎて最後の

落ちが分からない。果たして笑えるようになったのは記憶時間が増えたからだと考えられ、認知機能の回復とも思われる。

こういったプロセスで、失敗と成功を繰り返しながら、演劇情動療法は役立つものになっていった。また私自身も俳優と演出者としての気付きを多く得ることが出来た。綿密に編み込まれた言葉を用いる演劇の力を再認識し、更なる課題解決に貢献出来る可能性も感じている。作品選びの基準として考慮すべきは、感情移入のしやすさ。物語の背景に現実味があり、人物の葛藤・心情描写がリアルであること。また状況変化にテンポがあり退屈させない物語であること。不条理な展開や、情景描写が丁寧すぎる作品には反応が良くなかった。

演劇はなぜ求められたのか

「演劇情動療法」が生まれるきっかけを作った佐々木英忠院長、藤井昌彦理事長が私に「認知症患者を感動させてほしい」と依頼するまでには、次のような考えがあった。(論文より引用)

- 人の機敏を味わうという試みは認知症には無理ではないかということまで放置されてきたのではないか。
- 認知症になっても感情は比較的健在で人としての感動を健常者と同様に感じる人たちが少なくない
- 人に感動させることは健常者でも相当の修行が必要で

ある。まして認知症に感動を与え ることはさらに困難と考えられる。医療・介護スタッフは不足し疲弊しているのが現状である。それでは外からの応援として芸術家の力を借りて感動する時間を持つこと。これは認知症リハビリテーション医療の効率化につながる

演劇が提供できる「感動」を認知症医療の中に取り入れる。認知症医療専門家と演劇専門家のコラボレーションにより現場効率的を上げることが実現した。

エラボレーション（綿密な共同）は欠かせない

演劇情動療法は俳優のみでは成立しない。医療側とのエラボレーションが必須とされる。佐々木院長はじめ、医療・介護スタッフは病院側のデータから認知力、情動力調べ参加者を決定。それぞれの生い立ち、人生経験、家族構成などを把握し、朗読作品の選択に必要な情報を伝えてくれる。朗読後のお喋り、語らいの話題の方向性にもヒントを与えてくれる。更にスタッフはセッションの間も参加者の体調変化に目を配り、何かあっても朗読や

上演の妨げにならないように配慮して対応するという神業をやっつけてのける。すなわち医療介護スタッフは、舞台を支える大黒柱。

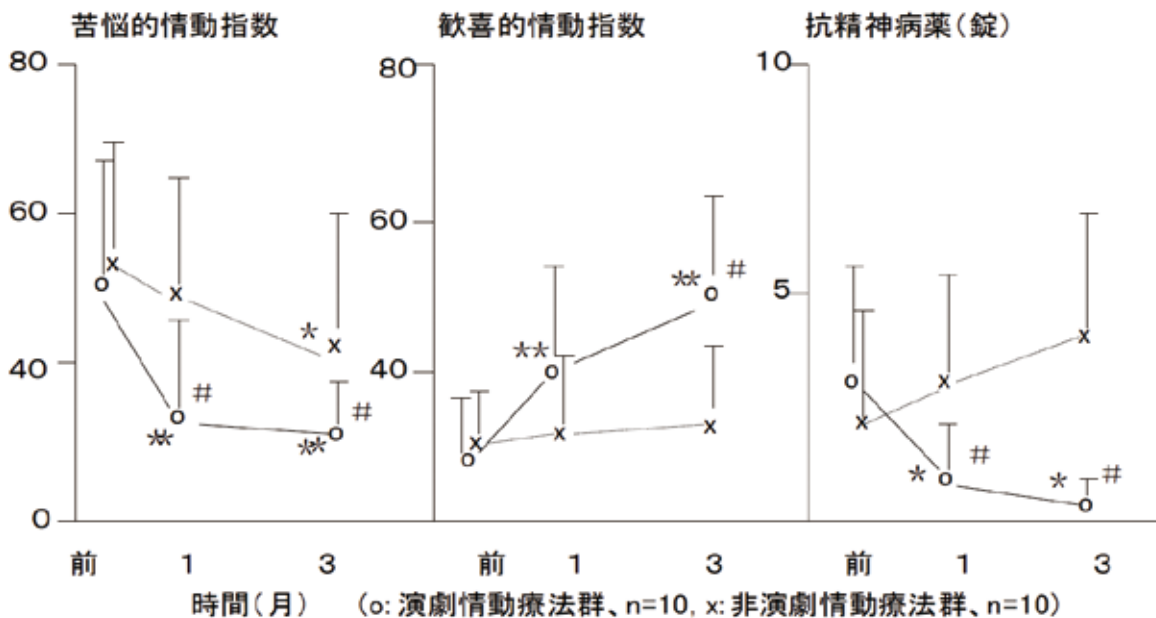
これらが上手くシンクロした時に、セッション参加者に対し大きな効果を発揮する。このことは、一般の舞台公演で俳優、演出、舞台監督、劇場運営、制作がハイレベルで共同作業を行うのとまったく同じプロセスが行われており、まさに病院は劇場なのである。

演劇情動療法の成果

一般的にBPSD（介護抵抗や徘徊などの行動・心理症状）を抑えるために抗精神病薬を用いるが、時間の経過とともに処方数を増やす必要がある。しかし薬により感受性

が落ちるので、人としての喜びや感動を得にくくなる。すると、歓喜的情動指数は下がり苦惱的情動指数（辛い・苦しい）が上がるというネガティブスパイラルに陥る。

図1 演劇情動療法による歓喜的情動指数



Yusaku Maeda, Keita Fukushima, Satomi Kyoutani, James P. Butler, Masahiko Fujii and Hidetada Sasaki
Dramatic Performance by a Professional Actor for the Treatment of Patients with Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia Tohoku J. Exp. Med., 2020, 252, 263-267

演劇情動療法を行った群では、苦惱的情動を下げつつ、薬の力価が不明なので有意差は出ないが、向精神薬の処方数減少の傾向が見られた。このように演劇情動療

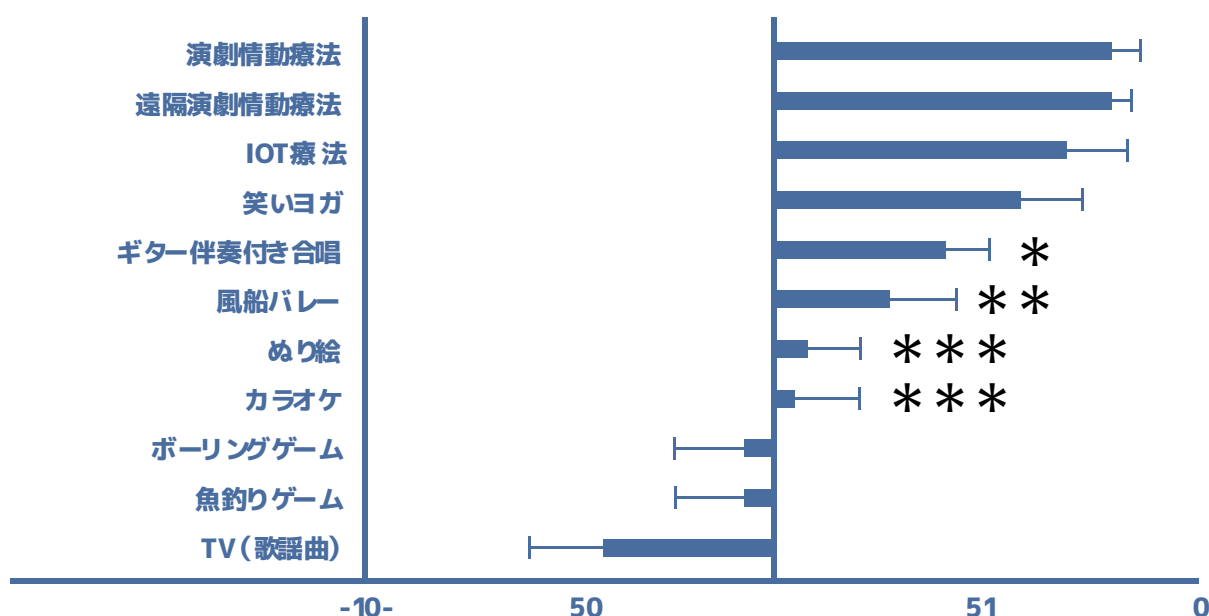
法を行うことで歓喜的情動が増え、BPSDが落ち着き、薬による影響を減らすことができ、介護に対する感謝など人らしい感情の表出が見られるようになった。

演劇情動療法の可能性

演劇情動療法はこれまでデイサービスでの実践を経て、入院病棟での実践を行った。さらにコロナ禍の状況に置いてはZOOMを用いて遠隔演劇情動療法を行うようになった。私が自宅にいながら宮城県の仙台富沢病院と山形県の山形厚生病院の病棟へ同時に演劇情動療法の

セッションを行った。結果として、実際に対面して行う演劇情動療法に匹敵する効果を得られた。この件は令和3年10月13日に行われた、第32回日本老年医学会東北地方会で発表され、来場者の大きな関心を得た。

図1 情動満足度指数



ZOOMの利用によって家族を交えての演劇情動療法は実現しやすくなるだろう。

認知症患者に対する家族の理解不足は改善すべき課題である。

認知症になった親が、演劇情動療法によって笑い・感

動し・涙を流す様子を見れば、認知症となっても本人の中に生き生きとした情動が温存されていることが理解できる。それにより家族の介護が改善された実例がある。認知症問題の解決は家族の正しい理解が重要である。



参考資料(アンケートフォーマット)

華陽フロンティア高校演劇ワークショップ MSC エピソード記入シート

記入日：	記入者名：
エピソードのタイトル	
<p>Q1-1 あなたの考えでは、<u>貴校で今年の演劇ワークショップを始めてからこれまでの間に、生徒の自己表現・自己肯定感の向上</u>に関して起った重大(=意義深い)な変化のエピソードは何ですか？(5W1Hなどなるべく具体的に)</p>	
<p>Q1-2 あなたがその変化を重大だと思う理由をお書きください。</p>	

エピソードのタイトル	
<p>Q2-1 あなたの考えでは、<u>貴校で今年の演劇ワークショップを始めてからこれまでの間に、生徒のクラス・先生・地域とのコミュニケーション</u>に関して起った重大な変化のエピソードは何ですか？(なるべく具体的に)</p>	
<p>Q2-2 あなたがその変化を重大だと思う理由をお書きください。</p>	

<p>Q3 演劇ワークショップを通じて生徒の自己肯定感が向上したと思いますか(○をつける)？</p> <p>1. 大変低下した 2. 低下した 3. 変化なし 4. 向上した 5. 大いに向上した</p>
--

さいたま市若者自立支援ルーム（桜木）演劇プログラム MSC エピソード記入シート

日付：	記入者名：
エピソードのタイトル	
<p>Q1-1 あなたの考えでは、<u>演劇ワークショップを初めて現在までの間に、参加した若者の意識や行動に</u>起った最も重大（＝意義深い）な変化のエピソードは何ですか？（できる範囲で結構ですので、なるべく具体的に）</p>	
<p>Q1-2 あなたがその変化を重大だと思ふ理由をお書きください。</p>	

エピソードのタイトル	
<p>Q2-1 あなたの考えでは、<u>演劇ワークショップを初めて現在までの間に、自立支援ルームの施設内</u>に起った最も重大（＝意義深い）な変化のエピソードは何ですか？（なるべく具体的に）</p>	
<p>Q2-2 あなたがその変化を重大だと思ふ理由をお書きください。</p>	

エピソードのタイトル	
<p>Q3-1 あなたの考えでは、<u>演劇ワークショップを初めて現在までの間に、自立支援ルームを取り巻く地域社会に</u>起った最も重大（＝意義深い）な変化のエピソードは何ですか？（なるべく具体的に）</p>	
<p>Q3-2 あなたがその変化を重大だと思ふ理由をお書きください。</p>	

<p>Q4 演劇ワークショップを通じて、若者の<u>チャレンジ精神が育った</u>と思ひますか（○をつける）？</p>	
<p>1. 大変低下した 2. 低下した 3. 変化なし 4. 育った 5. 大いに育った</p>	



文化庁委託事業
令和3年度障害者等による文化芸術活動推進事業
(文化芸術による共生社会の推進を含む)

やってみようプロジェクト

デザイン：西英一

印刷：株式会社平河工業社

2022年3月

発行：公益社団法人日本劇団協議会

〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-12-30 芸能花伝舎3F

TEL :03-5909-4600 FAX :03-5909-4666

info@gekidankyo.or.jp

公益社団法人日本劇団協議会

交流事業部：西川信廣、衛紀生、大鳥裕土、公家義徳、高橋正徳、横内謙介、渡辺弘
有馬理恵、佐藤尚子、柴田義之



演劇は
社会の
処方箋